

鳥取県米子市

き　た　は　ら　だ　い　い　せ　き
喜多原第5遺跡

2007. 3

財団法人 米子市教育文化事業団



喜多原第5遺跡から望む淀江平野（南より）



喜多原第5遺跡全景（東より）

序

鳥取県西部地域の米子市周辺は、北に雄大な日本海、南に秀峰大山を控え、美しい自然環境に恵まれた地域で国史跡である妻木晩田遺跡や上淀庵寺など、いにしえより貴重な文化遺産に恵まれた、遺跡の宝庫としても知られております。

当事業団では鳥取県の委託を受け、鳥取県立喜多原学園改築工事に伴い、喜多原第5遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡12棟などの集落跡を確認することができました。これは、妻木晩田遺跡につづく大山山麓の当時の集落の様相を知るための、貴重な資料を提供するものと考えております。これらの資料が、今後の調査研究の一助となり、本報告書が多方面にわたって広く活用していただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご協力をいただきました学園関係者の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、その他関係各位に対し心から感謝申し上げます。

2007年3月

財団法人 米子市教育文化事業団
理事長 小林道正

例　　言

1. 本報告書は、鳥取県立喜多原学園改築工事に伴い、平成18年度に実施した、米子市泉字喜多原に所在する喜多原第5遺跡の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が行った。本報告書で使用した座標値は世界測地V系に基づいている。方位は真北を示す。
3. 本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「淀江・米子」を使用した。
4. 調査では、基準点と航空撮影をフジテクノ有限会社に、本報告の年代測定、樹種同定を株式会社古環境研究所に、鉄製品の保存処理を元興寺文化財研究所に委託した。
5. 発掘調査及び報告書の編集は、笹尾千恵子が行った。
6. 掘団のうち、造構実測は調査員・補助員が、造構の浄写は秦が、遺物の実測・浄写は埋蔵文化財調査室で行った。造構・遺物写真は笹尾が、鉄製品の写真撮影は当調査室の佐伯純也が、鉄製品のX線撮影は鳥取県埋蔵文化財センター野田真弓氏の協力を得た。
7. 出土遺物・図画・スライド等は米子市教育委員会に保管されている。
8. 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導助言・協力していただいた。明記して感謝いたします。(敬称略)

河合章行　　清水真一　　下江健太　　高尾浩司

凡　　例

1. 調査段階での造構名は、略号を用い、検出した順番に割り当てた。
2. 本報告書における遺物の記号はF：鉄製品　S：石製品　J：土製品とする。
3. 本報告書における造構図は1/80、1/100で、遺物図は1/1、1/2、1/4、1/8の縮尺で掲載した。
4. ピット、土坑の寸法は(長軸×短軸×深さ)cmで表した。
5. 造構図面のピット番号は、左上より時計回りに振った。
6. 造構構図中のセクション・エレベーションの基準線標高はL=の記号で表した。
7. 土器実測図のうち、須恵器は断面墨塗で、石製品の実測図で断面は←→で表した。
8. 遺物に記載している造構名は、発掘調査時の造構名である。
9. 遺物には喜多原第5遺跡の略号として「KTHR5」を使用し記入した。
10. 時期の決定に際しては、下記の土器編年によっている。

清水真一1992年「因幡・伯耆地域『弥生土器の様式と編年』山陰・山陽編」株式会社木耳社
濱田竜彦2003年「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」

『妻木晚田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
青木遺跡発掘調査団編1978年『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2

第2章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査の成果

第1節 壁穴住居跡	8
第2節 掘立柱建物跡	31
第3節 横列状遺構	36
第4節 溝状遺構	37

第4章 自然科学分析

第1節 喜多原第5遺跡における樹種同定（株式会社 古環境研究所）	38
第2節 喜多原第5遺跡における放射性炭素年代測定（株式会社 古環境研究所）	39

第5章 調査の総括

第1節 壁穴住居跡	41
第2節 掘立柱建物跡	42

挿図目次

- 第1図. 調査地位置図
- 第2図. 調査区の設定
- 第3図. 嘉多原第5遺跡位置図
- 第4図. 周辺遺跡分布図
- 第5図. 遺構配置図
- 第6図. 竪穴住居1遺構図
- 第7図. 竪穴住居1遺物図
- 第8図. 竪穴住居2遺構図
- 第9図. 竪穴住居2遺物出土状況図
- 第10図. 竪穴住居2遺物図1
- 第11図. 竪穴住居2遺物図2
- 第12図. 竪穴住居3・4遺構図
- 第13図. 竪穴住居3遺物図
- 第14図. 竪穴住居4遺物図
- 第15図. 竪穴住居5遺構・遺物図
- 第16図. 竪穴住居6遺構図

- 第17図. 竪穴住居6遺物図
- 第18図. 竪穴住居7遺物図
- 第19図. 竪穴住居7遺構図
- 第20図. 竪穴住居8遺構図
- 第21図. 竪穴住居8遺物図1
- 第22図. 竪穴住居8遺物図2
- 第23図. 竪穴住居9遺構・遺物図
- 第24図. 竪穴住居10遺構・遺物図
- 第25図. 挖立柱建物1~5遺構図
- 第26図. 挖立柱建物6遺構・遺物図
- 第27図. 挖立柱建物7遺構・遺物図
- 第28図. 横列1遺構図
- 第29図. 溝1~5遺構図
- 第30図. 島根県内布掘り建物遺構図1
- 第31図. 島根県内布掘り建物遺構図2
- 第32図. 島根県内布掘り建物遺構図

図版目次

- 図版1 1. 調査区全景(東より)
2. 竪穴住居1・2 検出状況(東より)
3. 竪穴住居1・掘立柱建物1完掘(東より)
4. 竪穴住居2 遺物・炭化材出土状況(東より)
5. 竪穴住居2 壁(26)出土状況(東より)
6. 竪穴住居2 完掘(西より)
7. 竪穴住居3・5 検出状況(南より)
8. 竪穴住居4・5 検出状況(南より)
- 図版2 1. 竪穴住居3・4・5・6 完掘(北より)
2. 竪穴住居6・7 検出状況(西より)
3. 竪穴住居6 完掘(北より)
4. 竪穴住居7 挖り下げ中(北より)
5. 竪穴住居7 完掘(北より)
6. 竪穴住居8 床面検出状況(北より)
7. 竪穴住居8・横列1完掘(北より)
8. 竪穴住居6・7・8 完掘(北より)
- 図版3 1. 竪穴住居9 検出状況(北より)
2. 竪穴住居9 完掘(北より)
3. 竪穴住居10 検出状況(東より)
4. 竪穴住居10 完掘(東より)
5. 挖立柱建物1完掘(西より)
6. 挖立柱建物2完掘(西より)
7. 挖立柱建物3・4完掘(西より)
8. 挖立柱建物5完掘(西より)

- 図版4 1. 挖立柱建物6(布掘り)S20出土状況(北より)
2. 挖立柱建物6(布掘り)完掘(北より)
3. 挖立柱建物6・7(布掘り)検出状況(東より)
4. 挖立柱建物7(布掘り)完掘(西より)
5. 調査A区 完掘全景(上空より)
6. 調査B区 完掘全景(上空より)
7. 試掘トレンド(南より)
8. 調査完了後埋め戻し風景(東より)
- 図版5 1. 竪穴住居1 出土遺物
2. 竪穴住居2 出土遺物1
- 図版6 竪穴住居2 出土遺物2
- 図版7 1. 竪穴住居3 出土遺物
2. 竪穴住居4 出土遺物
3. 竪穴住居5 出土遺物1
4. 竪穴住居5 出土遺物2
- 図版8 竪穴住居6 出土遺物
- 図版9 1. 竪穴住居7 出土遺物
2. 竪穴住居8 出土遺物1
- 図版10 竪穴住居8 出土遺物2
- 図版11 1. 竪穴住居9 出土遺物
2. 竪穴住居10 出土遺物
3. 挖立柱建物6 出土遺物
4. 挖立柱建物7 出土遺物
- 図版12 遺構出土鉄製品およびX線写真1
- 図版13 遺構出土鉄製品およびX線写真2

挿表目次

- 表1. 竪穴住居1ビット表
2. 竪穴住居2ビット表
3. 竪穴住居3・4・5・6ビット表
4. 竪穴住居7ビット表
5. 竪穴住居8ビット表
6. 竪穴住居9ビット表
7. 竪穴住居10ビット表

- 8. 挖立柱建物1~7ビット表
9. 横列1ビット表
10. 島根県内布掘り建物一覧
11. 島根県内布掘り建物一覧
12. 土器観察表
13. 石製品観察表
14. 鉄製品観察表

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査にいたる経緯

今回の発掘調査地点のある米子市泉字喜多原周辺には、喜多原第1遺跡をはじめとする喜多原遺跡群、岡成第9・10遺跡をはじめとする岡成遺跡群などの埋蔵文化財が数多く存在することが知られていた。

発掘調査区内には、鳥取県立喜多原学園の学校施設が建っており、喜多原学園改築工事に伴い、米子市教育委員会が遺構の有無を確認するため、平成17年度に試掘調査を行った。その結果、竪穴住居跡などの遺構が分布していることが確認された。

これを受け、鳥取県（福祉保健部子ども家庭課）は米子市教育委員会と協議し、財団法人米子市教育文化事業団に発掘調査を委託し、埋蔵文化財調査室が発掘調査を担当した。

第2節 調査体制

調査体制 調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理 事 長 小林道正

埋蔵文化財調査室

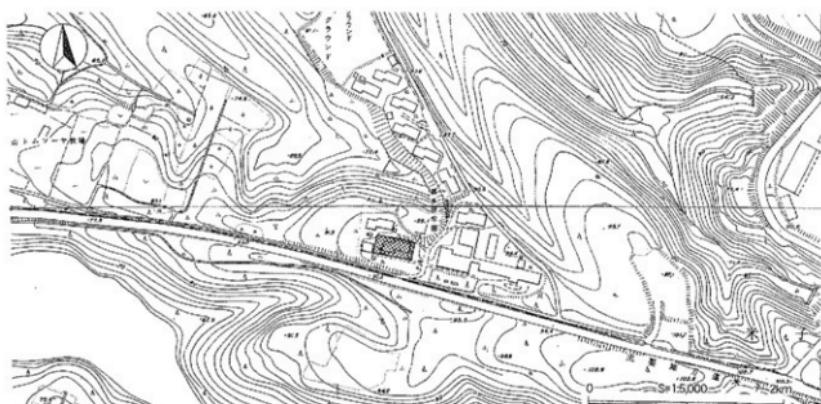
室 長 長谷川明洋（米子市教育委員会文化課課長）

事務担当 非常勤職員 田中昌子

調査担当 主任調査員 笹尾千恵子

嘱託職員（調査補助員） 秦美香

調査指導 米子市教育委員会



第1図 調査地位置図

第3節 調査の経過

喜多原第5遺跡は、試掘調査前には、学校施設が建っていたため著しく破壊を受けている可能性があると考えられ遺構の残存が危ぶまれた。しかし、試掘調査の結果遺構の存在が確認された。そのため、学園施設の改修がおこなわれる面積800m²の範囲を本調査することになった。

調査範囲の表土及び廃土量を推定すると、調査区周辺には搬出ができないため、東側半分（A区・440m²）の表土及び廃土を西側調査区へ置き、東側調査区終了後（図版4-7参照）、西側半分（B区・360m²）の表土及び廃土を調査終了箇所へ移動する方法を取った。

現地調査は平成18年8月16日より着手し、8月17日よりA区の表土除去を重機によりおこなった。表土除去後の遺物包含層の掘り下げについては、人力によった。遺構検出後は、遺構の位置を1/100の図面に落とし、遺構検出状況の写真撮影終了後、任意にセクションを設定して掘り下げに取りかかった。B区の現地調査も同様の手順でおこなった。

調査途中ではあったが、A区の調査終了後の平成18年9月30日に現地説明会を開催した。現地説明会は一般市民に公開し、40名ほどの参加があった。これに先立つ、9月26日には、県立喜多原学園の生徒・教職員7名の現地見学を受け入れた。10月3日にはA区全体の航空撮影を行い、翌、10月4日よりA区の埋め戻しとB区の表土除去作業に取りかかった。

B区は10月11日より、人力による遺物包含層の除去と遺構検出を行った。11月2日にB区全体の撮影を行い、埋め戻し作業（図版4-8参照）を経て、11月10日に現地調査を終了した。

現地調査終了後、遺物洗浄、ネーミング、遺物実測、遺物撮影などの整理作業を進め、平成18年度末までに報告書作成作業を行った。



第2図 調査区の設定

第2章 位置と環境

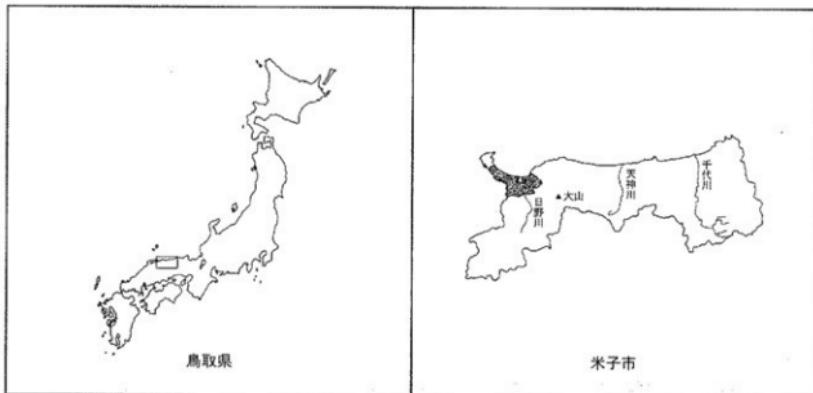
第1節 位置と地理的環境

鳥取県は、島根県・兵庫県・岡山県・広島県に隣接し、北を日本海、南を中国山地に囲まれた風光明媚な県である。県内は、東部（鳥取市）、中部（倉吉市）、西部（米子市・境港市）を中心とする3地域からなり、各地域では中国山地の恵みを受けた伏流水が千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）へ流れ込む。これらの河川によって運ばれた土砂は、堆積によって砂州や砂丘地をつくりだし、鳥取平野（東部）、北条・羽合平野（中部）、米子平野・淀江平野（西部）などを形成してきた。

米子市は平成17年3月31日に、西伯郡淀江町と合併し、新米子市として誕生した人口約150,000人、面積132.3km²の地方都市である。旧米子市は、弓ヶ浜半島の砂州が大きく日本海に伸び、日野川によって形成された米子平野に市街地が広がる「山陰の商都」と称された商業都市である。旧淀江町は、宇田川や天井川による堆積と扇状地によって作られた淀江平野に町並みがのびる、名水と史跡の町である。

喜多原第5遺跡は、鳥取県の西部、米子市泉字喜多原に所在し、名峰大山（標高1,729m）から噴出された火碎流などが創り上げた、なだらかな台地上の北西麓に位置する。（本書では、喜多原第5遺跡が所在する台地を「喜多原台地」と呼称する。）喜多原台地は、緩やかな起伏をもちながら舌状に延びており、先端の百塚原台地と呼ばれる地域には古墳時代後期の百塚遺跡群が広がり、淀江平野や日本海を一望できる良好な立地が目を引く。現在の喜多原台地は、畑地や水田、果樹園などへ開墾されているため、往時の面影が推察できるのは遺跡の北側に広がるなだらかな山林地帯のみある。

遺跡の南側には、台地を削平して作られた主要地方道米子・大山線（県道24号線）、「ときめきロード」が大山寺までのびているが、県道を挟んだ南側には弥生時代後期の集落遺跡・岡成第9遺跡が確認されている。「ときめきロード」に沿って大山寺へ約3km登ると、環境庁の名水100選に指定された因伯の名水「本宮の泉」がある。本宮の泉は日量30,000トンに及ぶ湧水量を誇り、水源付近は亜熱帯植物「クリハラン」が植生する自生地である。近年では、環境問題への関心の高さと健康志向から、名水を飲料水として利用する人々で賑わっている。また、喜多原第5遺跡の北側谷部でも昔がら水が豊富に湧き出していたといわれ、昔も今も、大山の恵みを享受した生活が営まれている。



第3図 喜多原第5遺跡位置図

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

喜多原第5遺跡では、これまでのところ旧石器時代の遺構、遺物は確認されていない。しかしながら周辺では、米子市淀江町小波原畠遺跡で杉久保型ナイフ形石器が、妻木晚田遺跡、米子市中峰遺跡、同諫訪西山ノ後遺跡、大山町門前第2遺跡でナイフ形石器が、同小谷遺跡で国府型ナイフ形石器などの旧石器時代の遺物が発見されている。これらの遺跡が、大山山麓周辺に立地することなどを考慮すれば、旧石器時代の人々が狩猟の場・生活の場として喜多原第5遺跡周辺でも暮らしていたと考えられる。

2. 繩文時代

早期に入ると、大山山麓の米子市上福万遺跡で押型文土器を伴う土坑や集石墓が作られはじめる。淀江平野周辺では、渡り上り遺跡において、早期末から前期に石錘や黒曜石剥片が多量に出土した。鉗ヶ口遺跡からは曾畑式土器等が出土している。喜多原第5遺跡では縄文時代の遺構・遺物の検出は無かったが、隣接する尾根上に点在する喜多原第1・2・3・4遺跡、岡成第9・10遺跡では落し穴や土器片などが検出されており、狩猟場の痕跡が確認されている。また、米子平野に目を移すと、前期から中期を中心とする米子市目久美遺跡でドングリの貯蔵穴が検出されるなど、当時の食糧状況を知る手がかりが見つかっている。

3. 弥生時代

水稻耕作が始まり、狩猟社会から農耕社会へと移り変わる中で、淀江平野では福岡遺跡や井手跡遺跡で木製の鋸や櫛、木包丁などが出土している。米子平野では、前期から中期にかけての低湿地遺跡・目久美遺跡で水田跡が確認されている。集落跡としては、前期後半になると淀江平野の北東、国史跡妻木晚田遺跡から西へ約1kmの丘陵上に、台地先端部を掘削した、直径約135mのV字状の環濠をもつ今津岸の上遺跡がある。中期に入ると福岡遺跡で、200基以上の粘土探査坑が検出されている。また、当時の社会状況や生活様式を読み解く手がかりとなる、線刻絵画土器が稻吉角田遺跡、日吉塚古墳下層から出土している。この時期、喜多原第5遺跡では遺構などの検出は無い。

喜多原第5遺跡の北東に位置する妻木晚田遺跡では、中期後葉から居住城が形成され、後期から終末期になると環濠や四隅突出型墳丘墓などの墳丘墓群にくわえて、数多くの竪穴住居や掘立柱建物がつくられ最盛期を迎へ大規模な集落となる。同じ頃、喜多原第2遺跡、岡成第9・10遺跡などで住居跡などの検出例があり、喜多原台地でも集落の営みが始まることになる。

4. 古墳時代

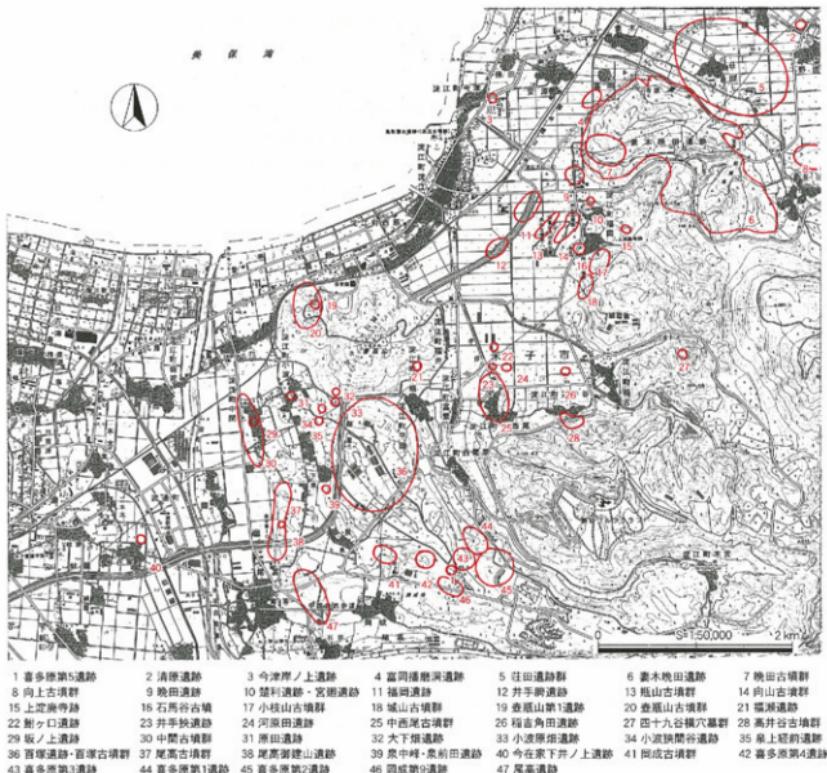
弥生時代後期の大規模な集落群が確認された妻木晚田遺跡では、古墳時代に入ると竪穴住居が減少する。一方、喜多原第5遺跡では、古墳時代前期初頭にも引き続き竪穴住居がつくられている。大山山麓地域におけるこの時期の集落跡の様相は明確ではないが、今回の調査によりその一端が明らかになった。中期から後期に入ると、百塚原台地に所在する百塚遺跡内には多くの竪穴住居跡群が形成される。

古墳では、前期に晚田山11号墳、米子市石州府29号墳等があり、中期前半には竪穴式石室から内行花文鏡や甲冑の出土した上ノ山古墳が、後半に入ると盾持人埴輪などの形象埴輪が出土した井出挾3

号墳がみられる。後期になると、石馬が出土したと伝えられる石馬谷古墳、複式石棺式石室をもつ国史跡岩屋古墳、金銅製透彫冠が出土した長者ヶ平古墳など大型前方後円墳が築かれる向山古墳群があり、百塚原台地には群集墳が広がる百塚古墳群がある。米子平野周辺では米子市陰田41号墳、宗像41号墳等が知られている。

5. 歴史時代

白鳳時代の代表的な佛教寺院として、彩色佛教壁画や塑像片が出土した国史跡上淀庵寺跡がある。上淀庵寺は683年の建立とされ、伽藍配置は金堂の東側に南北に三塔を配した、全国でも類例をみなないものである。その後、8世紀前半に大規模な修復を受けて以降、焼失する11世紀頃まで細々と手が加えられながら存続した。地方豪族による佛教崇拝は支配力＝財力の衰弱に伴い、律令制の象徴である寺院の衰退へと繋がっていったと考えられる。



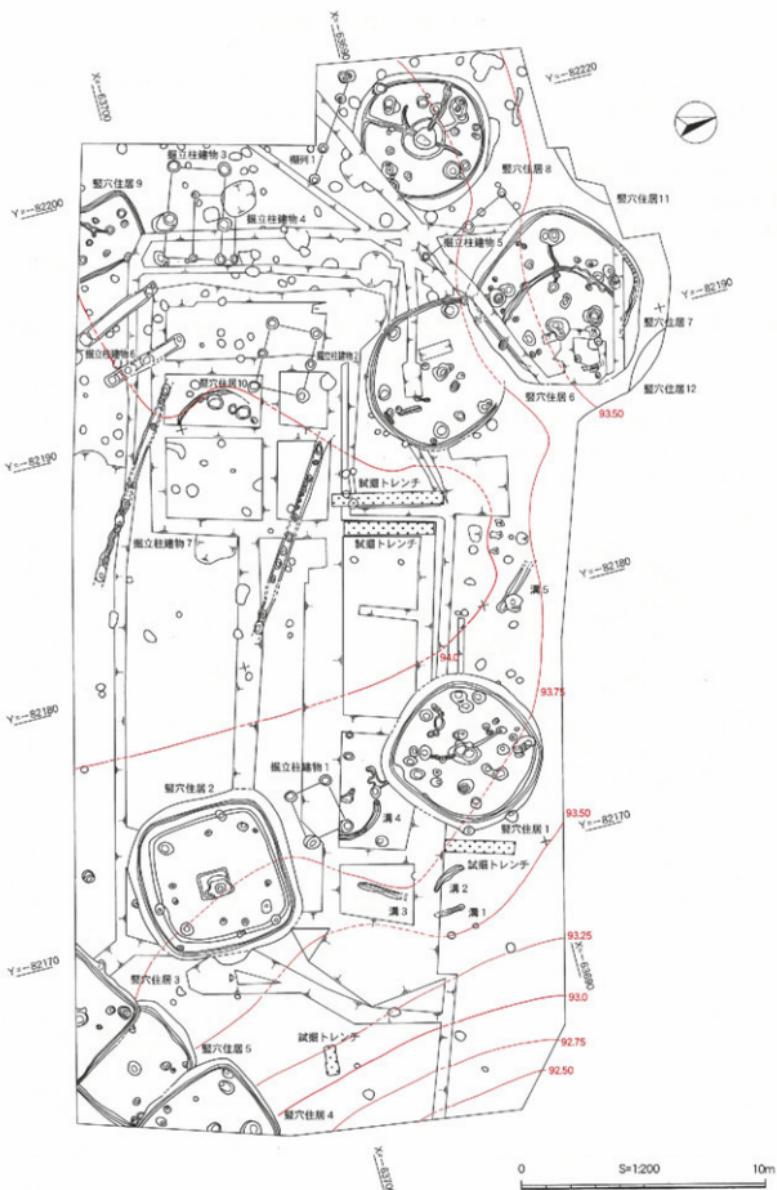
第4図 周辺遺跡分布図

9世紀になると、衰退した上淀庵寺に代わり庶民の信仰対象は、平安時代より大神岳（おおかみのみのたけ）と崇拝されていた修驗道の聖地である靈山・大山へとかわってゆく。靈山・大山は山岳仏教である天台宗と結びつき、中国地方の仏教の中心として大山寺を創建した。10世紀には、淀江平野にあつた宇多河庄が近江の日吉神社に寄進され莊園となるが、15世紀には大山寺に寄進され大山寺領となっている。この頃になると淀江平野全域に大山寺の支配力がいきわたっていたと考えられる。

喜多原第5遺跡を南に1kmほど下ると、大山寺に登るための旧道が今も生活道として残る。旧道付近の標高46mの丘陵部には、米子市史跡の尾高城跡（小鷹城・泉山城）がある。13世紀中ごろに築城されたと伝えられる尾高城は、郭や堀切、土塁が残る県西部最大の中世城館で、山陰道と山陽道に抜ける日野道との分岐点に位置しており、交通や物流の要衝の地に築城されていた。この尾高城をめぐっては尼子氏と毛利氏の激しい攻防があり、これを経て関が原以後、米子城完成後の1601年（慶長6）に廃城となるまで、西伯耆の拠点として重要な役割を担ってきた。尾高に暮らした人々は米子城完成後、米子城下に移り住み、尾高町をつくり莧藪・疊表などで町禄を得たといわれる。

喜多原第5遺跡が位置する喜多原台地周辺は、古代より大山山麓の恵みを享受し、大山信仰を信じ、政治的支配力を広げようとした人々の歴史を、今に伝える貴重な遺跡地帯である。

- 参考文献 佐々木謙 1981年『宇田川』 淀江町教育委員会
長岡充展他編1985年『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』 鳥取県教育文化事業団
小原貴樹編 1987年『喜多原第2遺跡発掘調査報告書』 米子市教育委員会
小原貴樹・下高瑞哉 1990年『米子市内遺跡発掘調査報告書（遺跡分布調査）』 米子市教育委員会
中山和之 1991年『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』 淀江町教育委員会
平木祐子 1993年『岡成第9遺跡』 米子市教育文化事業団
大田正康編 1992年『福岡遺跡』 鳥取県教育文化財団
大田正康編 1993年『今津塚田遺跡 福岡遺跡（6区）』 鳥取県教育文化財団
大田正康編 1993年『井出跨遺跡』 鳥取県教育文化財団
岩田文章 1993年『井出換3号墳』 淀江町教育委員会
中原齊 1993年『上淀庵寺Ⅲ』 淀江町教育委員会
西川徹編 1994年『泉中峰・泉前田遺跡』 鳥取県教育文化財団
濱田竜彦 2001年『麦木晚田遺跡発掘調査研究年報2000』 鳥取県教育委員会
濱田竜彦編 2003年『麦木晚田遺跡第4次発掘調査報告書』 鳥取県教育委員会
岩田文章編 2003年『日吉塚古墳』 淀江町教育委員会
佐伯純也 2003年『日久美遺跡』 米子市教育文化事業団
大川泰弘編 2004年『鳥取県中世城館分布調査報告書 第2集（伯耆編）』 鳥取県教育委員会
中森祥編 2005年『門前第2遺跡（菖蒲田地区）』 鳥取県教育文化財団
濱田竜彦・高尾浩司・馬路晃祥・河合章行 2006年
『史跡麦木晚田遺跡麦木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』 鳥取県教育委員会
杉谷愛象・下高瑞哉 1993年『米子市内遺跡発掘調査報告書（遺跡分布調査）』 米子市教育委員会
淀江町誌編纂委員会編 1985年『淀江町誌』
米子市史編さん協議会 1999年『新修米子市史 原始・古代』 米子市
米子市立山陰歴史館運営委員会 1976年『米子のふるさと散歩』 米子鷄ライオンズクラブ
淀江町教育委員会編 『淀江町文化財ガイド』 淀江町観光協会



第5図 遺構配置図

第3章 調査の成果

調査区の廃土置き場の都合上、調査地区をA・Bの2区に分けた呼称とし、東側半分を「調査A区」・西側半分を「調査B区」として調査に取りかかった。(第2図参照)

第1節 竪穴住居跡

竪穴住居1 (第6・7図、図版1・5)

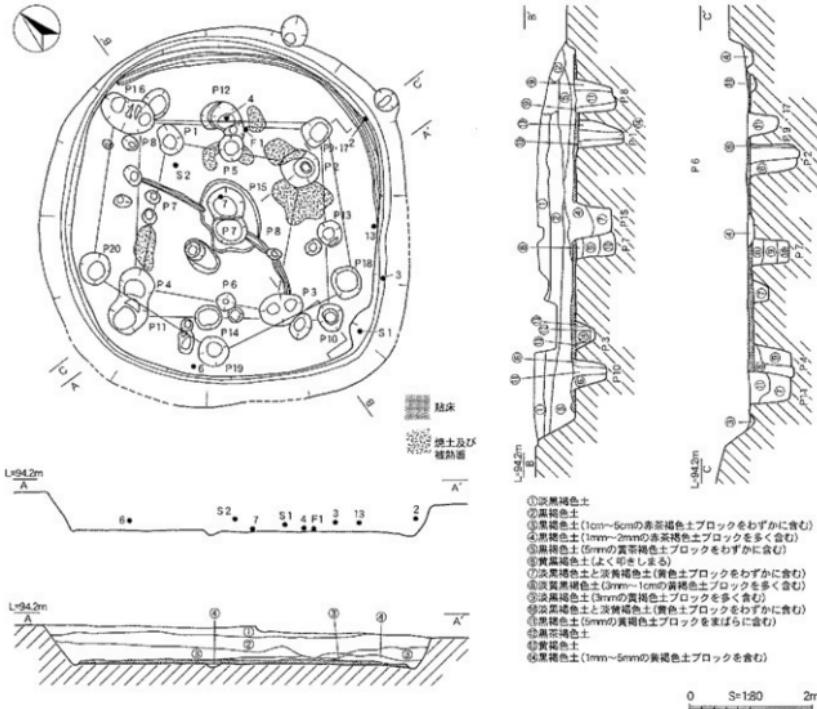
位 置 調査A区の北、標高94.0mで検出した。

形 態 圓丸方形を呈するが、長軸6.6m・短軸6.5mを測りほぼ円形に近い。北壁高は20cmを測り、南壁高は70cmを測る。壁の残りは良い。

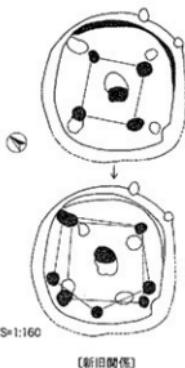
側 溝 壁面に沿って巡るが、住居北東側で二重に巡ることを確認した。この溝は内側の側溝を壊して外側の側溝が作られていた。幅10~20cm、深さ5~10cmを測る。

主 柱 P1~P4とP8~P11の各4本柱とP16~P20の5本柱と推定される。新旧関係が土層観察で確認できたのはP4とP11、P8とP16である。P4とP11はP4が古く、P8とP20はP8が古い。

補 助 柱 P1~P4の主柱に伴う補助柱は、P1~P2間のP5とP3~P4間のP6で、P



第6図 竪穴住居1遺構図



連続・ビットNo.	長軸 × 短軸 - 深さ (cm)	柱穴間距離 (cm)
主柱 堅穴住居 1	660 × 650 — 70	P 1 ~ P 5 ~ P 2 230 100~130
	50 × 40 — 70	P 2 ~ P 3 230
	60 × 50 — 80	P 3 ~ P 6 ~ P 4 250 110~140
	40 × 40 — 30	P 4 ~ P 1 250
補助柱	60 × 50 — 60	
	50 × 40 — 32	
	30 × 30 — 17	
中央ビット	80 × 50 — 60	
	58 × 44 — 60	
	50 × 40 — 70	P 8 ~ P 12 ~ P 9 300 140~160
主柱	50 × 40 — 50	P 9 ~ P 13 ~ P 10 310 170~140
	40 × 40 — 60	P 10 ~ P 14 ~ P 11 300 200~130
	64 × 44 — 70	P 11 ~ P 8 330
	70 × 42 — 38	
補助柱	44 × 44 — 31	
	41 × 40 — 37	
	90 × 60 — 60	
中央ビット	60 × 60 — 60	
	43 × 40 — 60	P 16 ~ P 17 336
	30 × 40 — 50	P 17 ~ P 18 256
	56 × 48 — 56	P 18 ~ P 19 240
主柱	36 × 56 — 60	P 19 ~ P 20 240
	56 × 48 — 63	P 20 ~ P 16 270
中央ビット	90 × 60 — 60	
	60 × 60 — 60	

表1 堅穴住居1ビット表

8～P 11の主柱に伴う補助柱はP 8～P 11間のP 12・P 13・P 14と推定される。P 11とP 8間に小ビットが確認されているが、P 12・P 13・P 14と比べ大きさ、深さとともに小さいことから補助柱としては除外した。

中央ビット 中央ビットはP 7とP 15で、土層観察から新旧関係を確認できた。中央ビットは肩部で浅い広がりの僅かな落込みをもつ二重ビットで、P 7からは南に溝が延び、P 15からは北に溝が延びる。溝は幅4～8cm、深さ4～6cmを測る。P 15直上から、甕7が出土している。

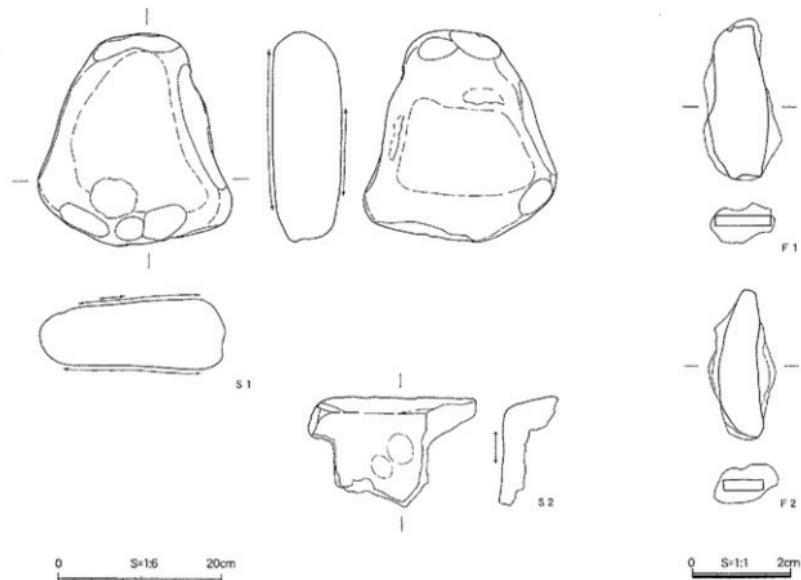
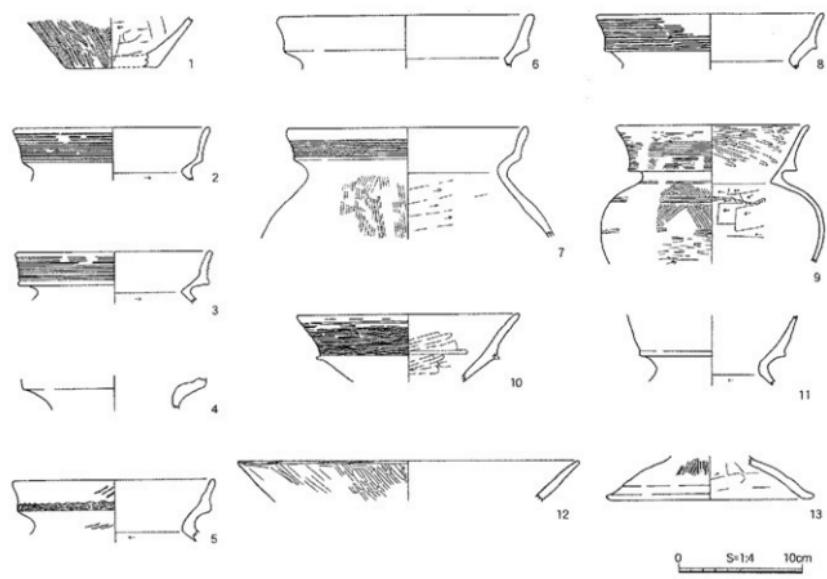
焼土及び被熱面 P 2・P 5周辺の上面で焼土面の広がりを確認した。この薄い焼土の堆積を除去後下層よりP 2・P 5を検出し、貼床面には被熱面の痕跡が確認できた。

床面 貼床床面は地山ブロックが入り、よく叩き締められていた。

遺物 甕は、4・7が床面直上で、9が埋土中で出土している。9は肩部に櫛状施文具による華麗な円弧状の紋様が施されている。装飾性に富んだ丁寧な作りの土器であるが、土器の表面には炭化物が付着していた。このような装飾をもつ甕は、鳥取市古海遺跡・青谷上寺地遺跡・米子市百塚第1遺跡・青木遺跡からも出土例が見られ、古海遺跡・青谷上寺地遺跡出土の甕のように、凹線と凹線の間に竹管文・半裁竹管文・同心円文などのスタンプ文を施すものや、百塚第1遺跡出土の甕のように円弧状の紋様を貝殻で施しているものもある。特に青谷上寺地遺跡では出土個体数が多く、赤色塗彩を施した土器など祭礼的要素の特徴がうかがえる。12は高杯で、内外面を丁寧に磨き仕上げる。10・11は器台。13は蓋で、摘み部分を欠損する。いずれも埋土中の出土である。F 1・F 2は鉄器片で、F 1はP 18の肩から、F 2は埋土中よりの出土である。S 2は火を受けた痕跡がみられる。

特徴 検出した側溝、主柱、中央ビット、貼床などのありようから、堅穴住居1は建替えがおこなわれたものと推定される。

時期 出土遺物などから、清水編年V-3期・濱田編年V-3期に相当し、弥生時代後期葉に比定されよう。



第7図 堅穴住居1遺物図

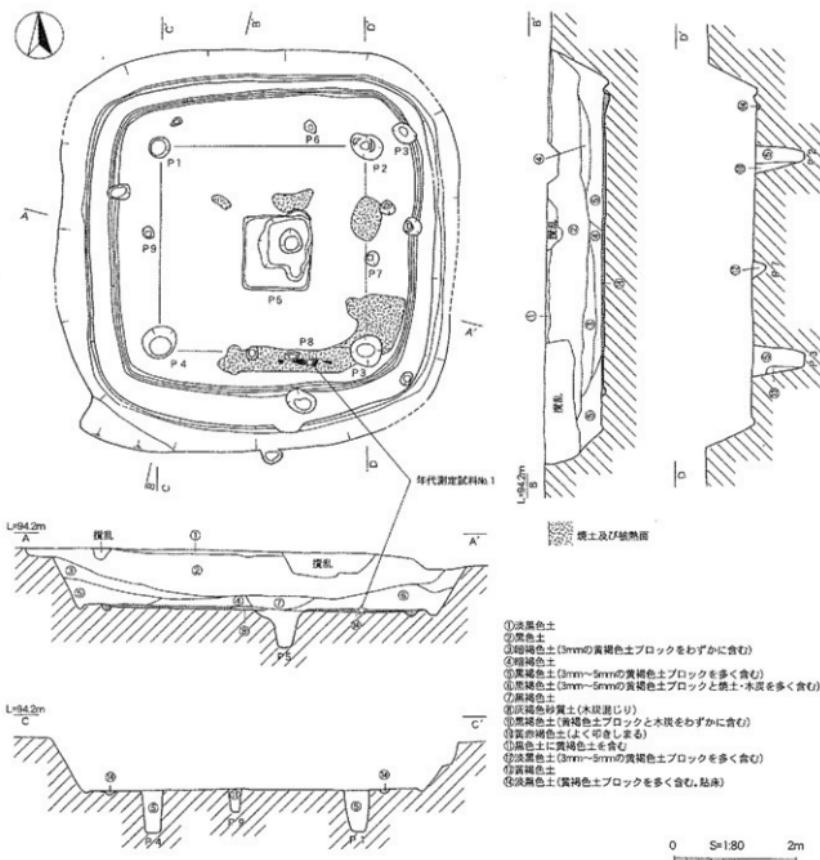
豊穴住居2 (第8~11図、図版1・5・6)

位 置 調査A区の南、標高94.0mで検出した。

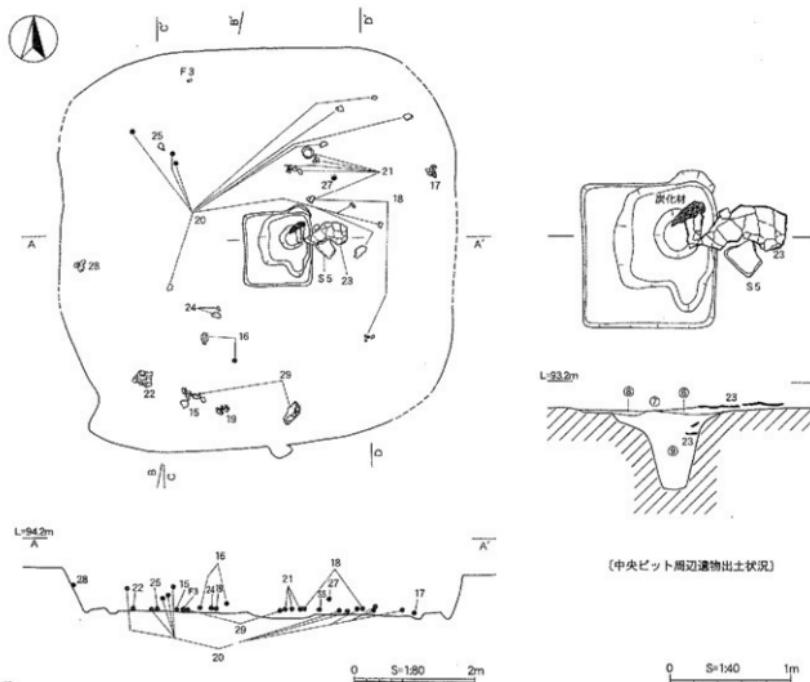
形 態 圓丸方形を呈し、長軸6.6m・短軸6.5mを測りほぼ正方形に近い。壁高は1mを測り、残りのよい住居跡である。

側 溝 壁面に沿って巡る側溝と、その内側に巡る二重の側溝が確認された。内側の側溝は、貼床面を取り除いた後検出された。いずれの側溝も、幅6~8cm、深さ5~10cmを測る。

主 柱 P1~P4の4本柱と推定される。垂木と推定される炭化材を、P3上面の焼土の埋土中より検出した。この炭化材は、自然科学分析(第4章第1節参照)でコナラ属コナラ節の樹木と同定されている。



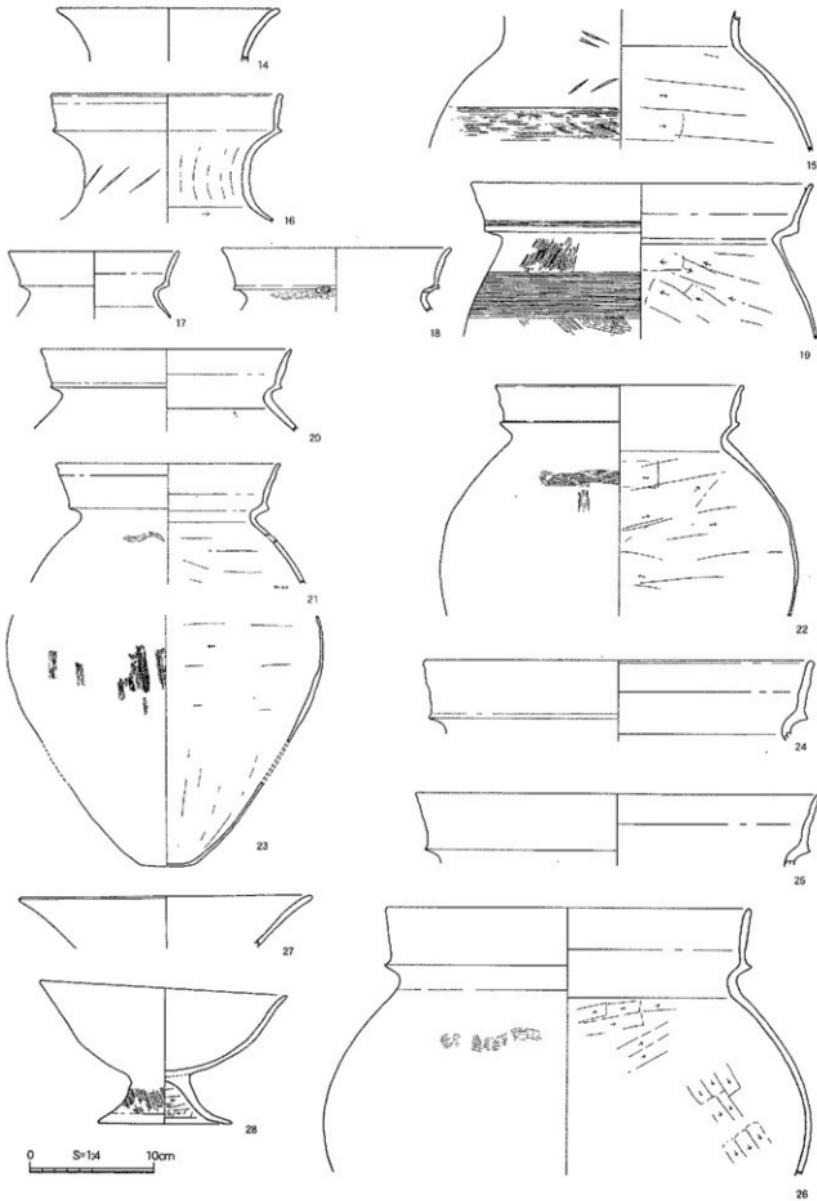
第8図 豊穴住居2遺構図



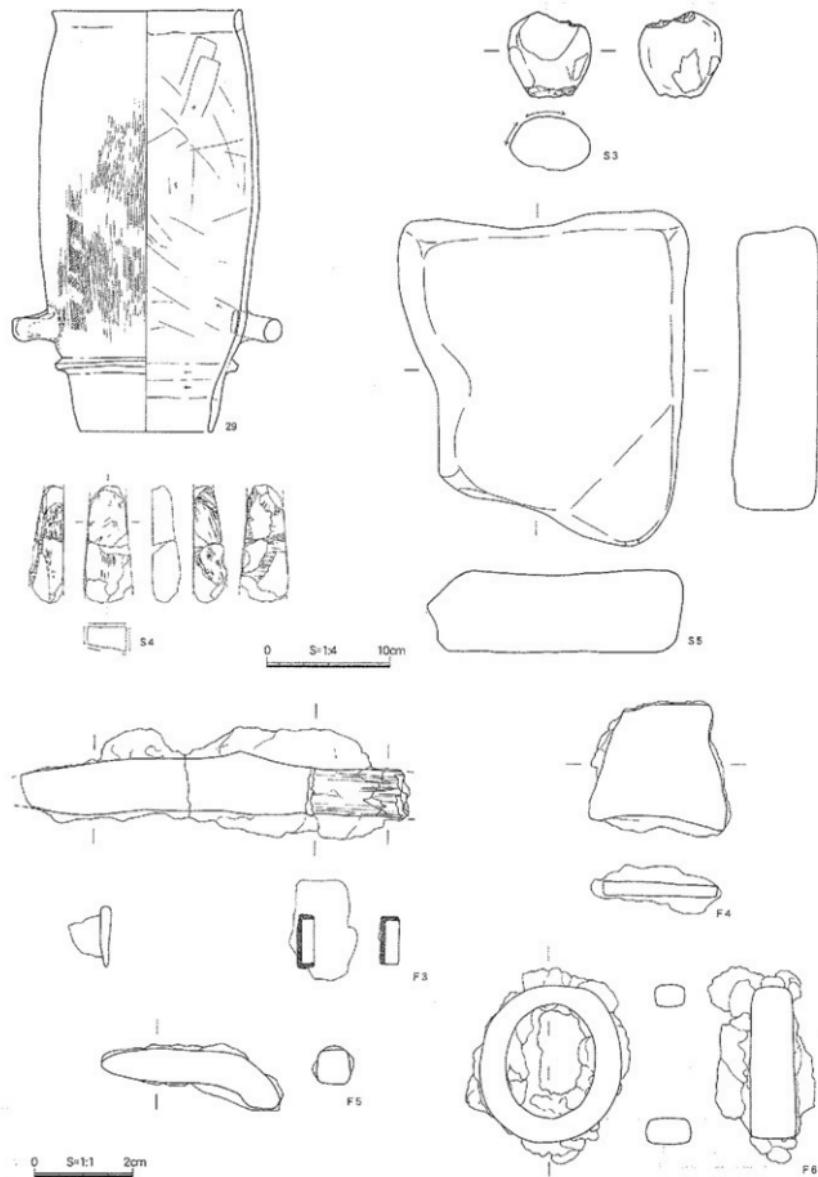
第9図 豊穴住居2 遺物出土状況図

遺構・ピットNo.		長軸×短軸 - 深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
豊穴住居2		660 × 650 — 90			P 1～P 2 330		
主柱	P 1	30	×	30	—	70	P 2～P 6～P 3 330
	P 2	50	×	40	—	80	P 3～P 4 330
	P 3	50	×	50	—	90	P 4～P 7～P 1 330
	P 4	50	×	50	—	70	180～150
中央ピット		P 5 110 × 80 — 60					
補助柱	P 6	30	×	20	—	20	
	P 8	30	×	20	—	5	
	P 9	20	×	20	—	40	

表2 豊穴住居2 ピット表



第10図 積穴住居 2 遺物図 1



第11図 積穴住居2 遺物図2

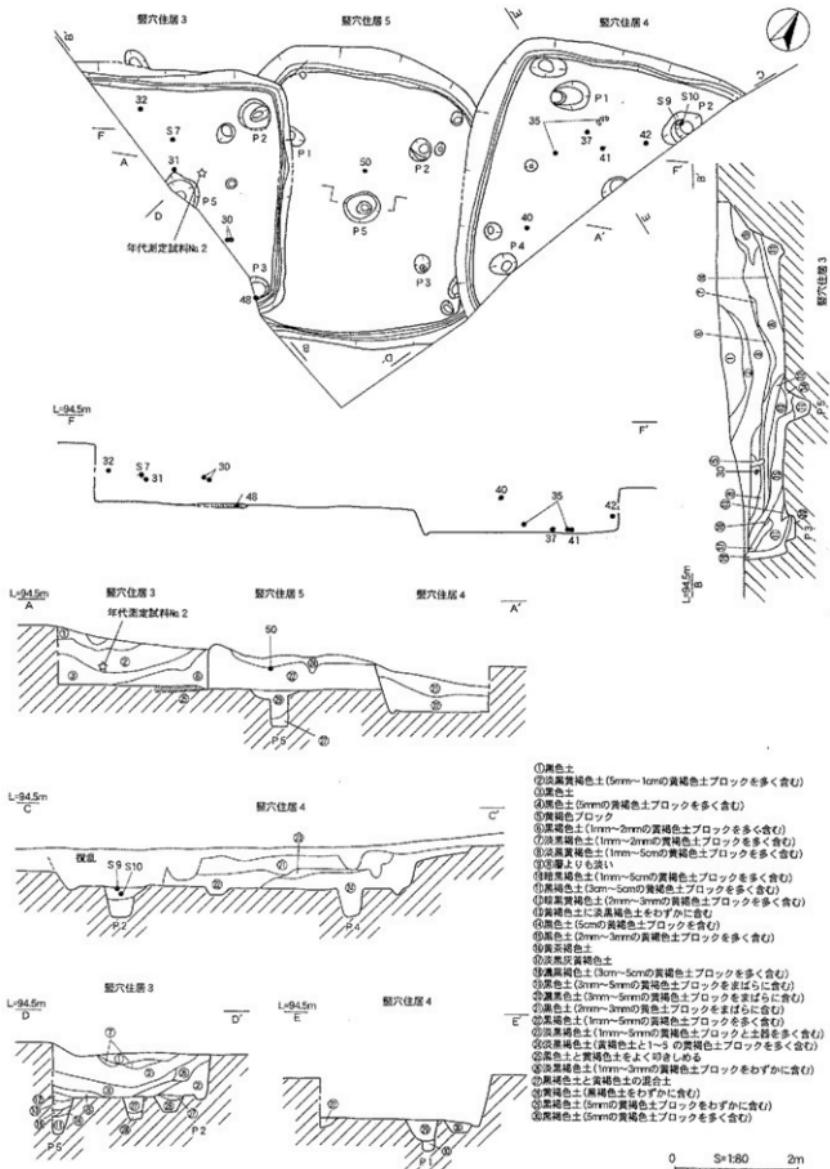
補助柱	補助柱は、P 6・P 7と推定されるがいずれも小ビットである。P 1とP 2、P 3とP 4の間に位置する小ビットは、深さが5cmと浅いため補助柱からは除外した。
中央ビット	中央ビットP 5は、浅い方形の掘り方をもつビットである。ビット上面からは広い範囲で炭化材を検出しており、ビット東側の肩部とビット内で壺23の出土があった。
焼土及び 被熱面	焼けた土が埋土として20cmほど堆積していた。上面から掘り下げを進めていくと特に南側の埋土で焼けた痕跡が広く明確に確認できた。⑥層はP 3直上に堆積しており炭化材を多く含んでいた。また、中央ビット北東付近の床面では、細かな炭化材の広がりが確認できた。住居全体を観察すると、西側より東側で焼け落ちた材や（第4章第2節年代測定試料No. 1参照）、焼土が多く見つかっている。これらのことから、竪穴住居2は焼失住居跡と推定される。
床面	中央ビット北西隅の床面で20cmほどの広がりをもつ、砂の混じった地山ブロックを多く含む貼床を確認した。その他の床面もよく叩き締められていた。この貼床を除去後、内側の側溝を確認している。
遺物	長頸壺14と壺15・16の2種類がみられる。15・16の頸部及び肩部にはヘラ状工具による施文が施される。15は床面直上で出土している。壺には17~22と平底の大型壺24~26の2種類がみられる。19は口縁が大きく外に開き、口縁下端部付近に凹線が僅かに残る。胴部には凹線が巡る。20・21は床面直上の出土であるが、広く散乱した状態で検出している。22は口縁部と胴部の一部が内面を上にし、床面に張り付いている状態で出土している。20の一部と22は内側の側溝上面より出土している。23は壺の胴部と底部の一部であるが、22と同じく床面に張り付く状態で出土した。中央ビット内と肩付近での出土状況から、⑥層と一緒に一部が流れ込んだと推定される。25・26はP 1の上面で少し浮いた状態、⑤層の下層で出土している。26は肩部に波状文が僅かにみられる。高环は27・28がある。28は住居西壁の⑤層の上面で脚部を上に杯部を下にした状態で出土したことから、⑤層が堆積し③層が流れ込む直前に流入したと推定される。小型の甑形土器29は、一部を欠くもののほぼ完形に復元できた。29の中に入っていた埋土中より、桃の種1個を検出した。F 3の刀子は、壁面に巡る側溝の北西側直上で出土している。先端部を欠くが、柄の木質部は遺存状態が良い。F 4不整台形状の鉄器片、F 5棒状の鉄器片、F 6不明円環状鉄製品は埋土中の出土である。S 3は打ち欠き石錘、S 4は4面をよく使い込んだ砥石、S 5は台石である。
特徴	19のように弥生時代後期後葉の特徴をもつ壺や、23のように平底が残る壺と、15・16のように新しい特徴を示す壺が、同一床面で出土している。出土遺物のほとんどが口縁部あるいは胴部までの残存しかない。中央ビットでみられた23と、埋土の流れ込みの様子などや炭化材の検出状況から、竪穴住居2は廃棄後、焼失したものと推定される。
時期	出土遺物などから、清水編年VI-2期以降、青木編年V・VI新～VII古に相当し、庄内併行期から古墳時代前期前葉に比定されよう。

竪穴住居3 (第12・13図、図版1・7)

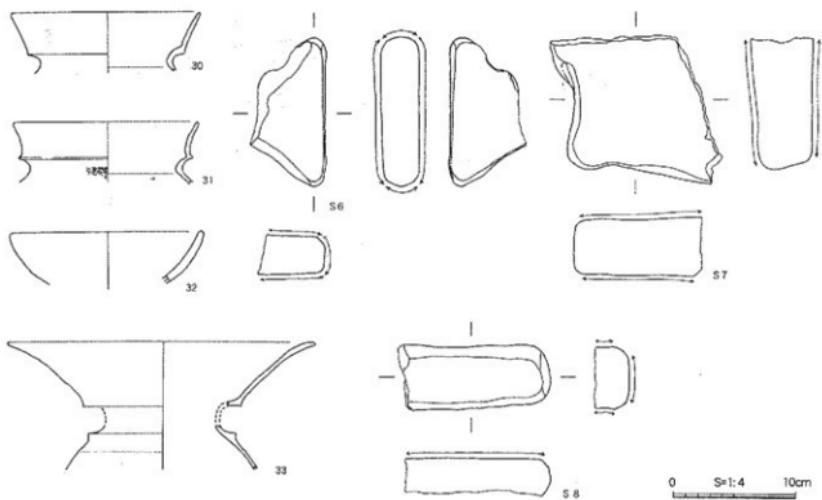
位 置	調査A区の南隅、標高94.0mで検出した。
形 態	隅丸方形を呈し、長軸3.9m・短軸残存3.4mを測る方形である。壁高は1.0mを測り、遺存状態のよい住居跡である。竪穴住居5と東側で切り合う。住居南西側は調査区外のため不明である。
側 溝	壁面に沿って巡る幅6～8cm、深さ5～8cmの側溝が確認された。
主 柱	P 1～P 4の4本柱と推定されるが、P 2・P 3の柱穴のみ検出した。
中央ピット	中央ピットP 5は、円形を呈する。
床 面	竪穴住居5の西側肩に貼床をして、竪穴住居3の東側床面としている。
遺 物	甕30・31、高坏32、器台33と磁石S 6～8が埋土中より出土した。
特 徴	切り合う竪穴住居3と竪穴住居5の新旧関係は、遺構検出時の状況と土層断面の観察より、竪穴住居3が新しく竪穴住居5が古いと考えられる。また、竪穴住居5の埋土②層(黒褐色土)を竪穴住居3の東壁面として利用していた。
時 期	出土遺物などにより、青木編年V・VI新～VII古に相当し、庄内併行期から古墳時代前期前葉に比定されよう。

竪穴住居4 (第12・14図、図版1・7)

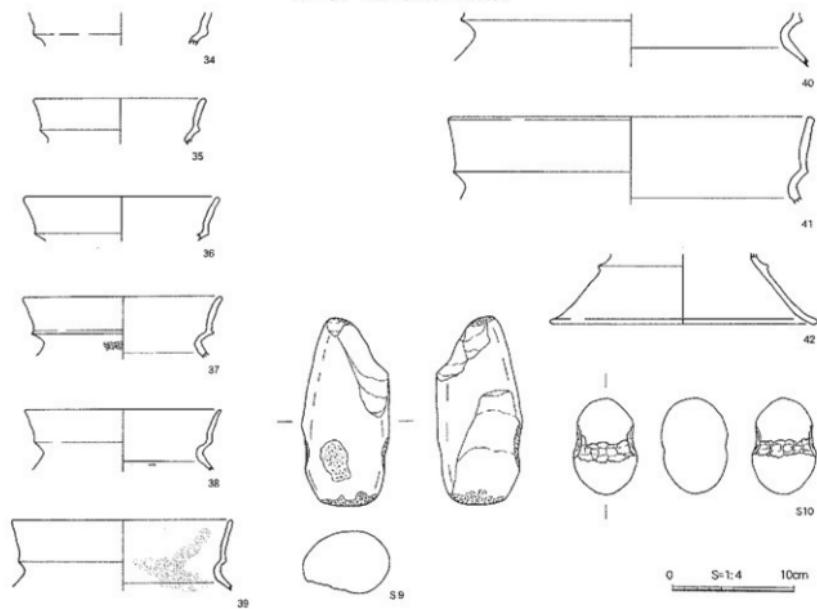
位 置	調査A区の南隅、標高94.0mで検出した。
形 態	隅丸方形を呈し、長軸4.6m・短軸残存4.0mを測る方形である。壁高は90cmを測り、遺存状態のよい住居跡である。竪穴住居5と西側で切り合う。住居東側は未調査地区のため不明である。
側 溝	壁面に沿って巡る幅6～8cm、深さ5～8cmの側溝が確認された。
主 柱	P 1～P 4の4本柱と推定されるが、P 3の柱穴は検出していない。
中央ピット	中央ピットP 5は、円形を呈する。
床 面	竪穴住居5を深く掘り込んで竪穴住居4が建てられている。
遺 物	甕には34～39と大型の甕40・41の2種類がみられる。35・37・41は床面より出土している。いずれも口縁端部を摘み上げながらナデ仕上げで終る。39の内面には赤色塗彩が残る。器台42は脚部が外方へ開く。敲石S 9と瀬戸内型有溝石錘S 10はP 3内上面から重なるように出土した。
特 徴	切り合う竪穴住居4と竪穴住居5の新旧関係は、遺構検出時の状況と、土層断面の観察より、竪穴住居4が新しく竪穴住居5が古いと考えられる。また、竪穴住居3と竪穴住居4の新旧関係は不明であるが、出土遺物、竪穴住居の掘り込みの深さなどを比較すると、竪穴住居4が新しい時期の住居跡と推定される。
時 期	出土遺物などにより、青木編年V・VI新～VII古に相当し、庄内併行期から古墳時代前期前葉に比定されよう。



第12図 墓穴住居3・4遺構図



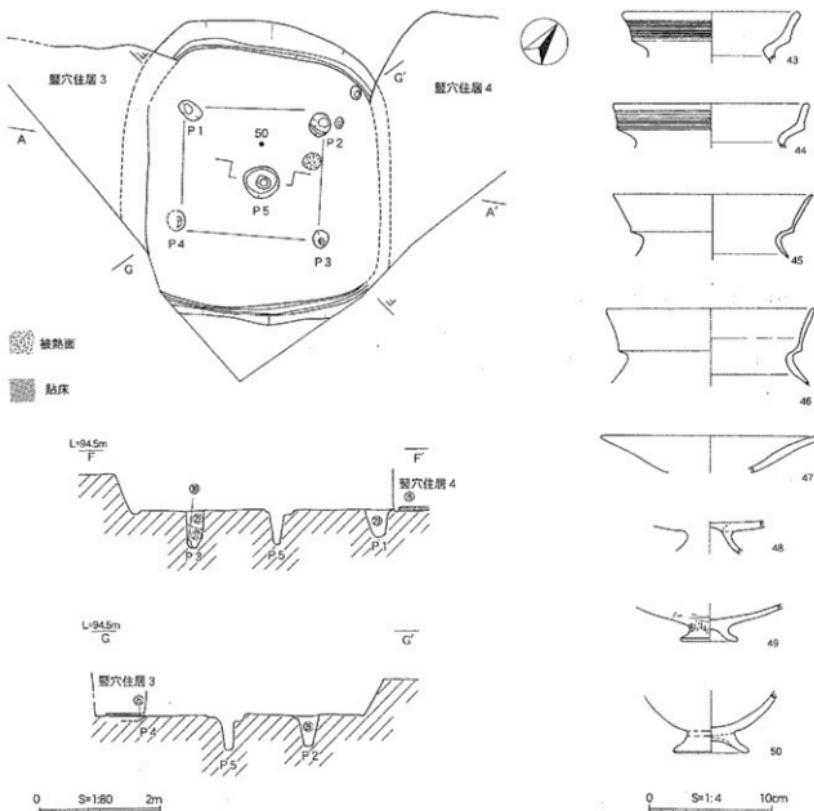
第13図 積穴住居3遺物図



第14図 積穴住居4遺物図

竪穴住居 5 (第15図、図版 1・2)

- 形 態** 圓丸方形を呈し、長軸5.0m・短軸推定4.4mを測る方形である。壁高は70cmを測る。
- 側 溝** 壁面に沿って巡る幅5~10cm、深さ10cmの側溝が確認された。
- 主 柱** P 1 ~ P 4 の 4 本柱である。
- 中央ピット** 中央ピット P 5 は、円形を呈する。
- 被 热 面** 中央北東寄りで、被熱面を確認した。
- 遺 物** 瓢43~46、低脚杯か蓋である。47、低脚杯48・49が埋土中より出土している。低脚杯50は壊部を下にした状態で、埋土層上面より出土した。
- 時 期** 出土遺物より、清水編年V-3期~VI-2期、青木編年Ⅲ新~V・VIに相当し、弥生時代後期後葉から庄内併行期に比定されよう。



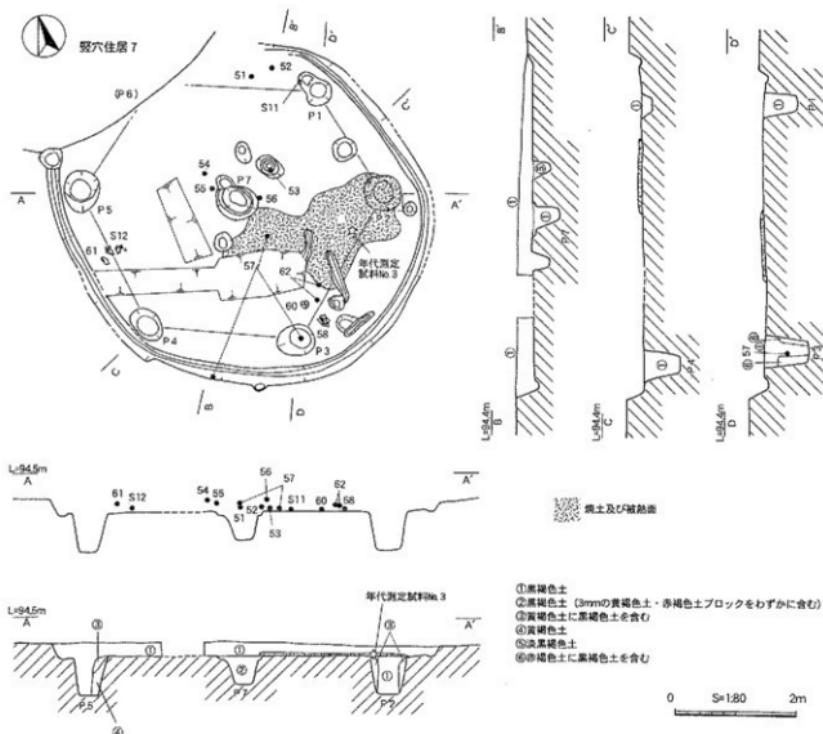
第15図 竪穴住居 5 遺構・遺物図

遺構・ピットNo. 竪穴住居3		長軸×短軸-深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
主柱	P 1	390	×	340以上	—	100	P 1～P 2
	P 2	60	×	50	—	30	P 2～P 3
	P 3	40	×	—	—	20	P 3～P 4
	P 4	—	—	—	—	—	P 4～P 1
	中央ピット	P 5	(30)	×	70	—	60
遺構・ピットNo. 竪穴住居4		長軸×短軸-深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
主柱	P 1	460	×	400	—	90	P 1～P 2
	P 2	70	×	—	—	50	P 1～P 4
	P 3	—	—	—	—	—	—
	P 4	40	×	40	—	50	—
	中央ピット	P 5	—	—	—	15	—
遺構・ピットNo. 竪穴住居5		長軸×短軸-深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
主柱	P 1	500	×	440	—	70	P 1～P 2
	P 2	40	×	30	—	50	P 2～P 3
	P 3	40	×	30	—	50	P 3～P 4
	P 4	—	—	—	—	—	P 4～P 1
	中央ピット	P 5	80	×	60	—	60
遺構・ピットNo. 竪穴住居6		長軸×短軸-深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
主柱	P 1	620	×	580以上	—	30	P 1～P 2
	P 2	70	×	50	—	60	P 2～P 3
	P 3	70	×	60	—	60	P 3～P 4
	P 4	60	×	50	—	70	P 4～P 5
	P 5	70	×	50	—	60	—
	中央ピット	P 6	—	—	—	—	—
	中央ピット	P 7	80	×	60	—	50

表3 竪穴住居3・4・5・6ピット表

竪穴住居6 (第16・17図、図版2・8)

- 位 置 調査B区の北、標高94.0mで検出した。
- 形 態 長軸5.6m・短軸5.6m以上を測りほぼ円形を呈する。壁高は30cmを測る。
- 側 溝 壁面に沿って巡る幅5~10cm、深さ5~10cmの側溝が確認された。
- 主 柱 P 1~P 6の6本柱と推定される。P 6は、竪穴住居7によって壊されている。
- 中央ピット 中央ピットP 7の肩部分は二重の掘り方をもつ。
- 焼土及び
被熱面 主柱P 2の上面から住居中央付近にかけて、焼土の広がりが確認できた。P 2床面周辺で被熱面を確認した。
- 床 面 床面に貼床の痕跡は確認できなかった。
- 遺 物 長頸壺51と壺52の2種類がみられる。壺54は床面より僅かに上の埋土中より出土している。壺は55~58であるが55~57と58には時期差がみられる。壺58と高杯60は床面に張り付く状態で出土している。60は内外面赤色塗彩、内面磨きで特殊な土器と考えられる。鉢61は丁寧な作りで、内外面に磨きを施す。このほか、甑形土器62、擦り石S 11、砥石S 12、鐵鏃F 7の出土があった。F 7は無茎凹基式三角形鐵鏃で、中央に孔をもつことがX線撮影で確認された。
- 特 徴 竪穴住居7で住居の北側が壊されている。竪穴住居7との新旧関係は、検出時の平面観察と出土遺物などから、竪穴住居6が古く竪穴住居7が新しい。
- 時 期 出土遺物などより、清水編年V~3期~VI~1期、青木編年Ⅲ新~IV期に相当し、弥生時代後期後葉から庄内併行期に比定されよう。



第16図 積穴住居 6 遺構図

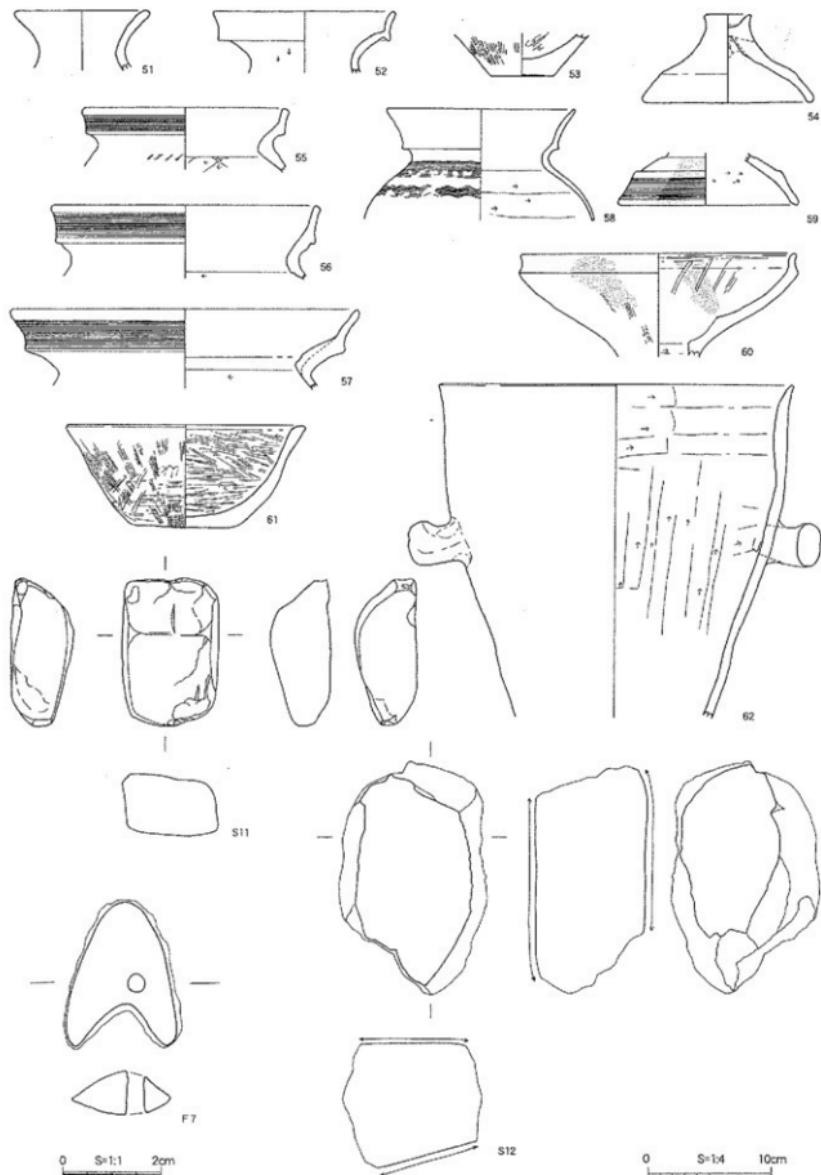
積穴住居 7 (第18・19図、図版 2・9)

位 置 調査B区の北、標高93.7mで検出した。

形 態 住居の南側で、後世の攪乱を受けるが、土層観察よりほぼ円形に近い長軸2.0m以上、短軸2.0mの積穴住居から、隅丸5角形を呈する長軸7.4m・短軸7.0mを測る住居へ建替えされたものと推定される。壁高は60cmを測るが、東側の壁は後世の攪乱によって壊されている。

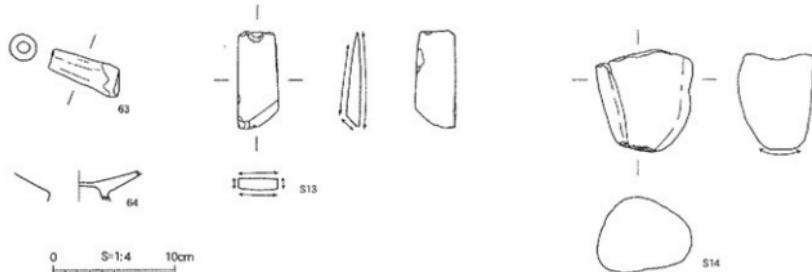
側 溝 壁面に沿って巡ると推定される、幅5~10cm、深さ5cmの新旧2つの側溝が確認された。住居の南側と東側の側溝は、後世の攪乱を受け一部検出できなかった。

主 柱 P1~P4の4本柱から、P7~P11とP13~P17の各5本柱であったと推定される。さらに主柱の検出状況と土層観察により、P7~P11からP13~P17へと柱の建替えがおこなわれたと推定される。



第17図 積穴住居6遺物図

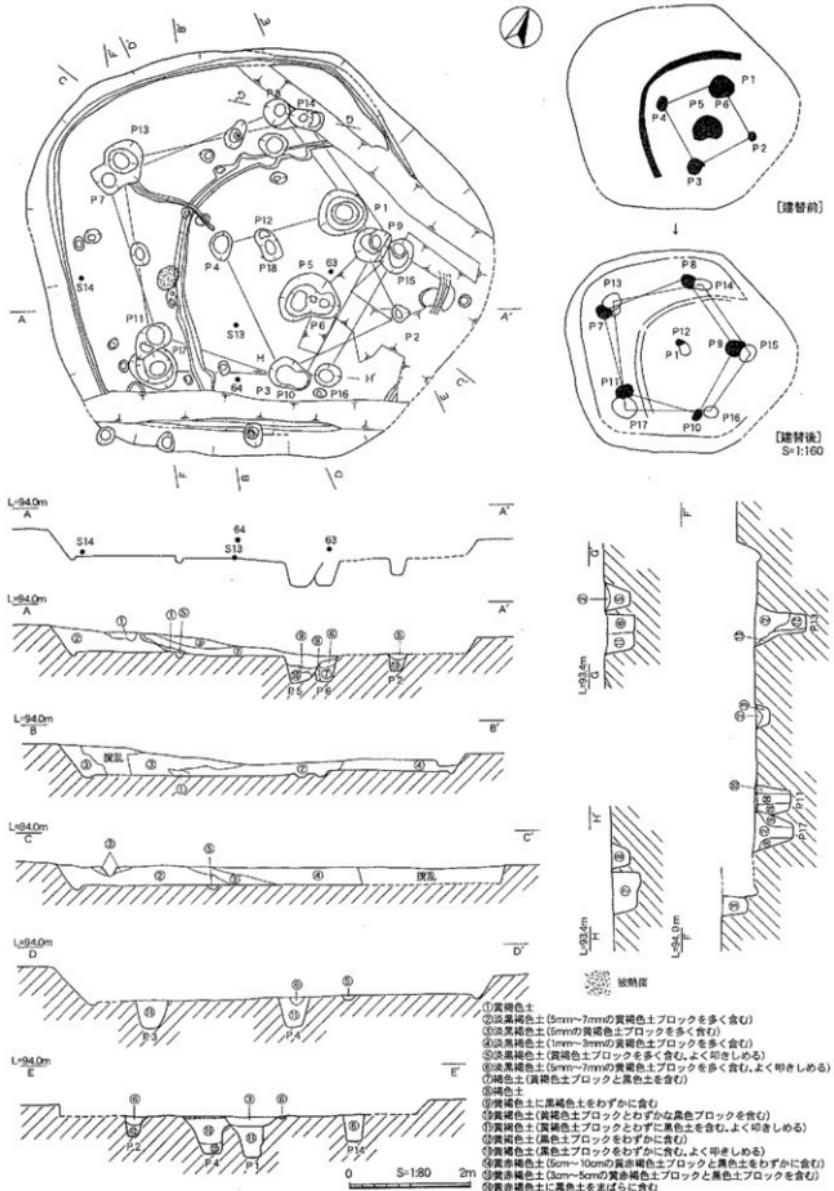
- 中央ピット** 中央ピットはP 5とP 6であるが、土層断面の観察ではP 6が古くP 5が新しい。建替え後はP 12とP 16であるが、P 12が古くP 16が新しい。
- 被熱面** 中央南西寄りで、被熱面を確認した。
- 床面** 床面には良く叩き締められた貼床が確認された。特にP 9周辺ではその痕跡が明瞭であった。
- 遺物** 注口土器の注ぎ口63と高坏64が埋土中より出土している。楔形石器S 13は先端部を下にし、床面に刺さったような状態で出土した。S 14磨石はである。
- 特徴** 住居検出時の埋土の状態は、自然堆積のありようではなく土屋根が一挙に落ちてきたような状態であった。喜多原第5遺跡の検出住居の中では、数回の建替えがおこなわれた住居であったと考えられる。また、規模は検出住居の中では一番大きいが、遺物の出土量が極端に少ない。
- 時期** 出土遺物での時期の決定はできないが、住居の形態や周囲の住居の時期などより、弥生時代後期後葉から庄内併行期に比定されよう。



第18図 積穴住居7遺物図

造構・ピットNo.	長軸×短軸－深さ(cm)				柱穴間距離(cm)			
積穴住居7	× 720 — 60							
主柱	P 1	80	×	80	—	70	P 1～P 2	200
	P 2	30	×	30	—	40	P 2～P 3	200
	P 3	60	×	(50)	—	30	P 3～P 4	220
	P 4	50	×	30	—	50	P 4～P 1	200
中央ピット	P 5	100	×	90	—	50	P 7～P 8	300
主柱	P 7	(50)	×	30	—	65	P 8～P 9	260
	P 8	50	×	40	—	40	P 9～P 10	260
	P 9	60	×	50	—	60	P 10～P 11	260
	P 10	40	×	(30)	—	40	P 11～P 7	260
	P 11	70	×	50	—	60	P 13～P 14	310
中央ピット	P 12	30	×	30	—	15	P 14～P 15	270
主柱	P 13	(70)	×	60	—	80	P 15～P 16	240
	P 14	60	×	30	—	50	P 16～P 17	280
	P 15	60	×	50	—	45	P 17～P 13	360
	P 16	40	×	40	—	30		
	P 17	80	×	70	—	60		
中央ピット	P 18	40	×	40	—	55		

表4 積穴住居7ピット表



第19図 竪穴住居7遺構図

豎穴住居8 (第20~22図、図版2・9・10)

位 置 調査B区の西端、標高94.0mで検出した。

形態　隅丸方形を呈するが、長軸6.0m・短軸5.8mを測りほぼ円形に近い。南側壁は後世の搅乱により壊されているが、全体の壁高は60cmを測り遺存状態はよい。

側溝 幅5~10cm、深さ5cmを測る側溝が壁面に沿って巡る。側溝から中央ピットに向けて幅5~15cm、深さ5cmを測る溝が検出された。

主柱 P1～P4の4本で、西側でP6とP7の柱穴を確認した。このP6とP7は土層断面の観察で、P1とP4より新しいことから、外側に向けて建替えたものと推定される。

補助柱 P 6 と P 7 のほぼ真ん中に P 8 が検出された。P 8 はその形状、深さから補助柱と推定される。

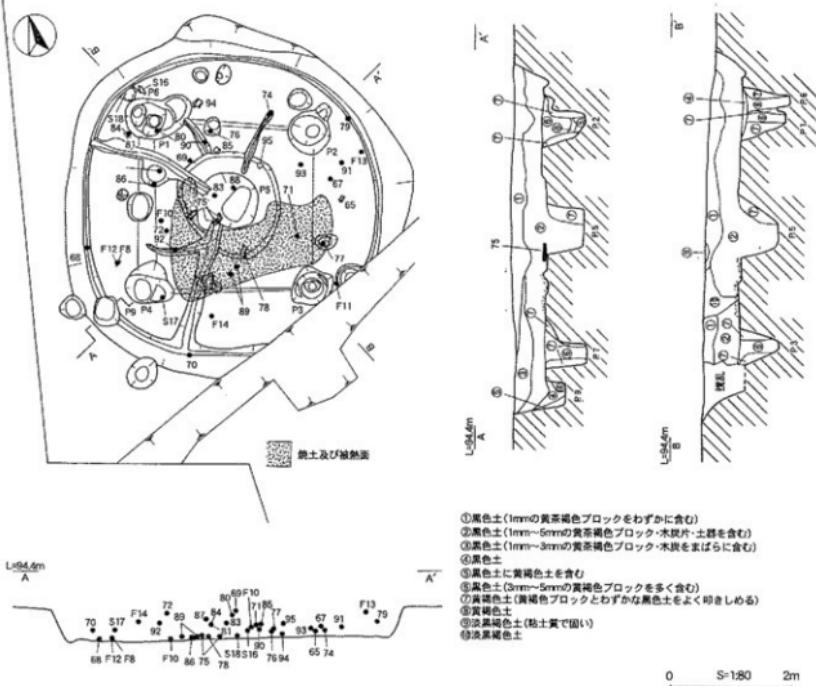
中央ビット 中央ビット P.5 は、肩部に浅い段のつく円形を呈する2重の大型ビットである。

住居中央付近から南側にかけて厚い堆積層(②層・黒色土)が確認された。焼土に

細かな炭化物が多量に含まれ、中央ピット付近では聞く焼きしまった赤い焼土の塊を

む広がりが確認された。埋土に含まれる炭化物の量の多少で分層したが、ほぼ一層の堆積のようにみられた。

中央ピット南側床面では被熱面が広がる。被熱面は赤く鮮明で、強く火を受けていた



第20図 竪穴住居 8 遺構図

遺構・ピットNo.		長軸 × 短軸 - 深さ (cm)				柱穴間距離 (cm)		
竪穴住居8		600 × 580 — 50						
主柱	P 1	20	×	30	—	70	P 1～P 2	260
	P 2	90	×	70	—	80	P 2～P 3	260
	P 3	80	×	70	—	60	P 3～P 4	260
	P 4	(40)	×	(40)	—	55	P 4～P 1	280
中央ピット	P 5	100	×	90	—	60	P 6～P 7	280
主柱	P 6	30	×	20	—	80	P 6～P 8～P 7	280
	P 8	(50)	×	(50)	—	70		140～140
補助柱	P 9	50	×	40	—	40		

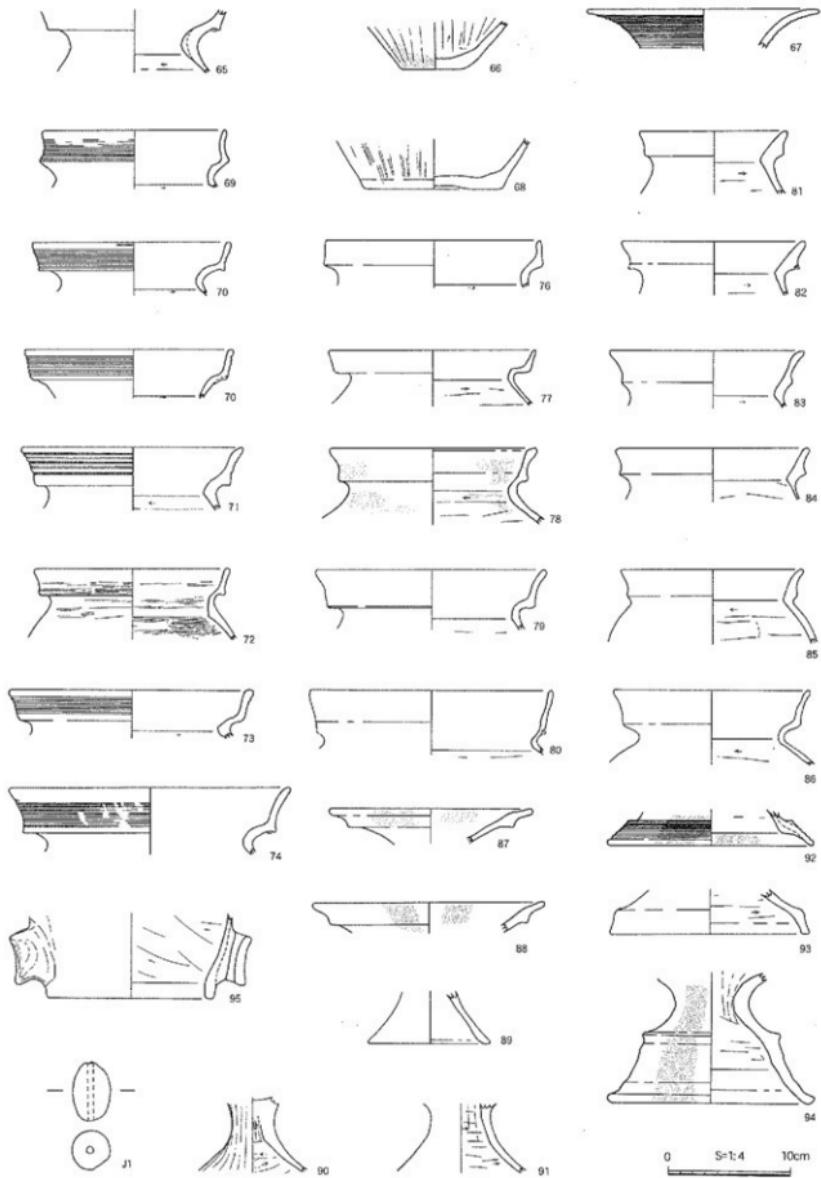
表5 竪穴住居8ピット表

ようであった。

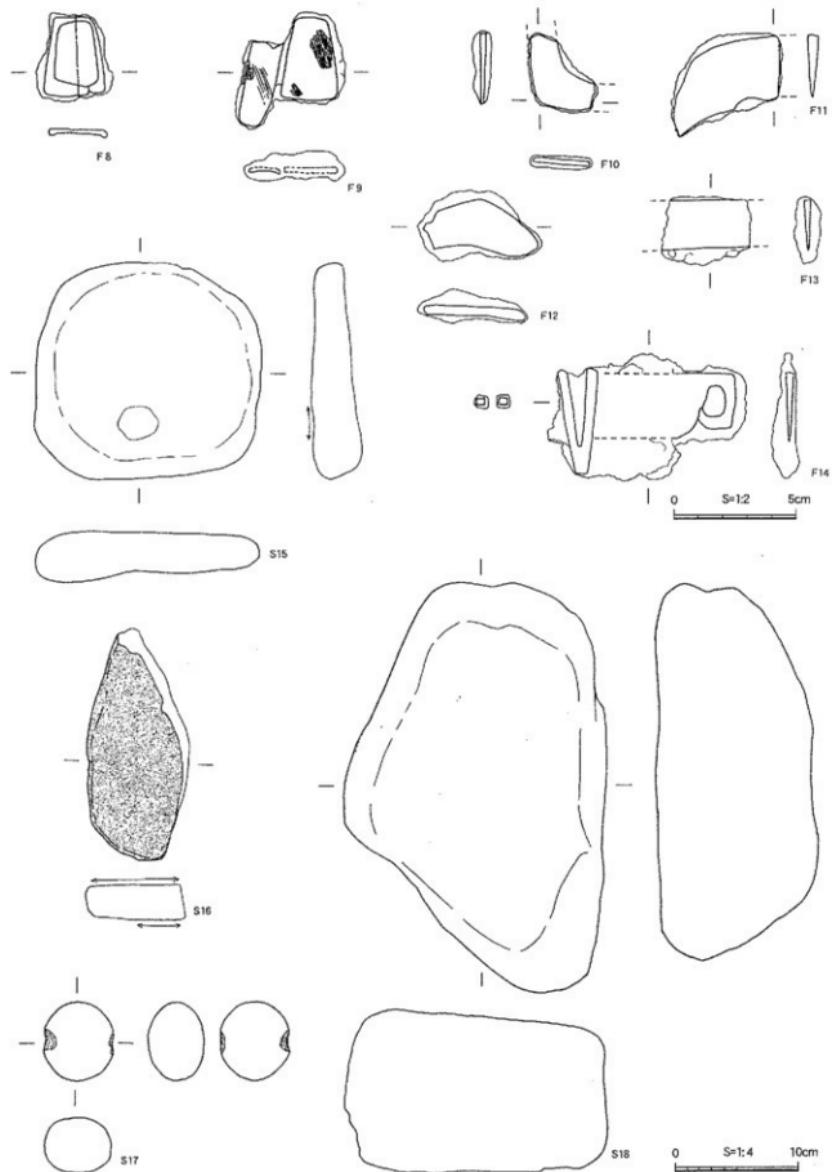
遺 物 壺は、65と長頸壺67の2種類がみられる。67は口縁部外面に凹線が施される。壺は、69～75が口縁部外面に凹線をもち、70・72・73・75は口縁下端部が明瞭に残る。76～86は口縁部をナデ仕上げしている。高坏は87～91。器台は92～94で、94は厚手のしっかりした作りである。壺78、高坏87・88、器台92・94には赤色塗彩がみられることから、特殊な用途に用いられたと考えられる。このほか、鉄製品のF8～F14が出土した。鉄製品はいずれもX線撮影（図版12・13参照）をおこなった。F 7は小型の鉄斧で中央に鑄造ラインが確認された。F 9は盤と槍鉋が鋒で付着した状態のもので、F 10は鉄斧の刃部、F 11は大型の曲刃鐵の先端部、F 12は不明鉄製品、F 13は刀子片、F 14は素環の刀子とV字状鐵製品が付着したものである。石製品はS15～S18である。S 16とS 18は住居内北側壁面の側溝横で、据え置かれたように出土した。S 16は火を受けた痕跡がみられる砥石で、S 15・S 18は台石と推定される。S 17は石錘であるが溝が巡る形態ではなく、両側面を打ち欠いて繋りの部分を作り出している。J 1は土玉である。竪穴住居8は喜多原第5遺跡の検出住居の中で、遺物の出土量が最も多い。

特 徴 埋土の上層から下層にかけて、細かな炭化材が多く検出された。埋土は一層に堆積したようにみられ、分層に際しては粘質や炭化材の含まれる量の多少で区分した。また、床面直上における焼土は厚さと広がり、色彩の鮮明さが、喜多原第5遺跡で検出した、他の住居の焼土（被熱面）とは異なり、強く（高い）火を受けているものとみられた。焼土を取り除いた後の床の被熱面の広がりと土の色も、他の住居と比較すると特徴的であった。このほか、竪穴住居8からは7点の鉄製品が出土しているが、その中に大型鉄製品の破片が含まれている点が注目される。また、台石S 15・S 18、砥石S 16は石製鍛冶具ではないかと推察されることから、竪穴住居8は鍛冶関連遺構ではないかと推定される。

時 期 出土遺物などから、清水編年V-3期～VI-1期、青木編年Ⅲ新～IV期に相当し、弥生時代後期後葉から庄内併行期に比定されよう。



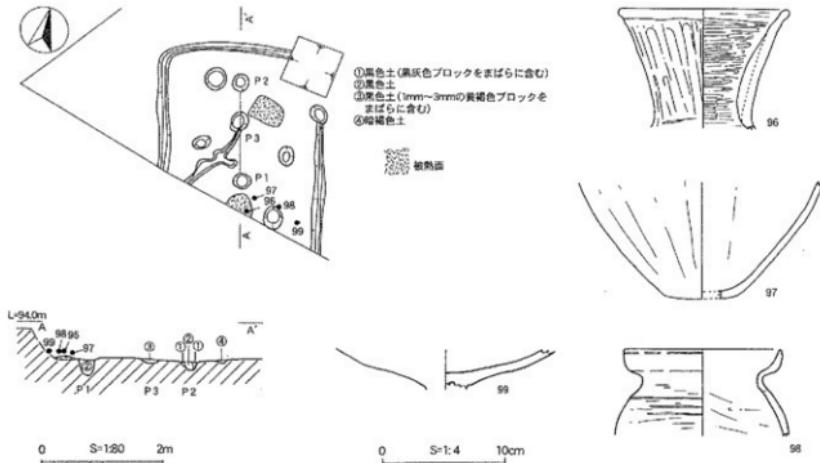
第21図 積穴住居8遺物図1



第22図 積穴住居 8 遺物図 2

堅穴住居9 (第23図、図版3・11)

- 位 置** 調査B区の南側隅、標高93.4mで検出した。
- 形 態** 囲丸方形を呈するが、長軸3.2m以上・短軸2.7mを測り長方形に近い。南側は一部調査区外にかかるため、住居全体の形態は不明である。壁高は残存していない。
- 側 溝** 幅20cm、深さ5cmを測る側溝が巡る。
- 主 柱** P1・P2の2本柱であると推定される。P3から南西に延びる幅5~10cm、深さ5cmを測る溝が確認された。
- 被 热 面** 中央ピット付近とP1付近で被熱面が確認された。
- 遺 物** 長頸壺の96は内外面ともに丁寧に磨きで仕上げる。底は97・98で、97は平底を残す。98は口縁下端部が鈍い。99は大型の坏部をもつ高坏である。
- 特 徴** 堅穴住居9は、喜多原第5遺跡検出の住居の中で一番小型である。側溝と被熱面を検出したため住居としたが、その規模からすると倉庫などの利用も考えられる。
- 時 期** 出土遺物などから、清水編年V-3期頃、濱田編年V-3期頃に相当し、弥生時代後期後葉頃に比定されよう。



第23図 堅穴住居9遺構・遺物図

遺構・ピットNo.		長軸×短軸 - 深さ (cm)			柱 六 間 距 離 (cm)		
堅穴住居9		270 × — 60					
主 柱	P 1	30	×	30	— 30	P 1 ~ P 3	100
	P 2	30	×	30	— 20	P 3 ~ P 1	60
中央ピット	P 3	30	×	30	— 10		

表6 堅穴住居9ピット表

堅穴住居10（第24図、図版3・11）

位 置 調査B区の南東隅、標高94.0mで検出した。

形 態 円形を呈すると推定される。

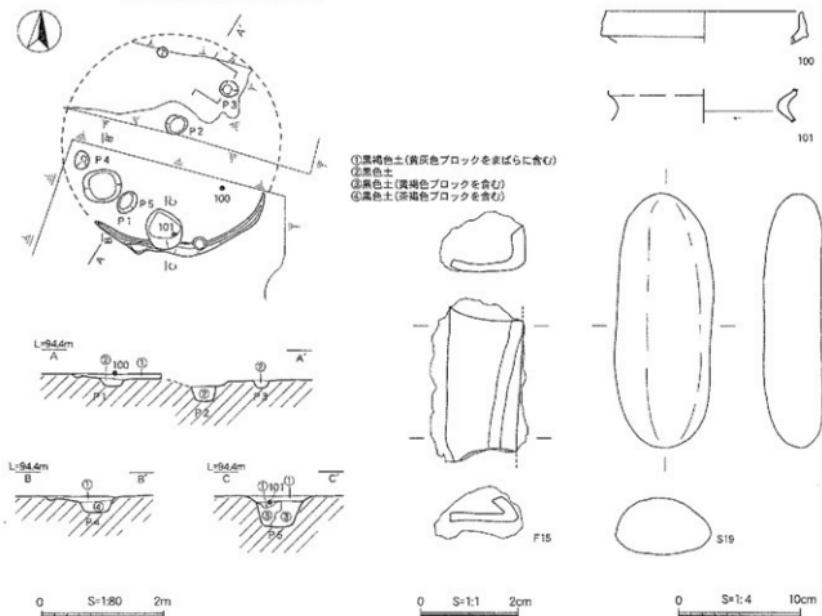
側 溝 南側にのみ、幅5~10cm、深さ5cmを測る側溝が僅かに残る。

主 柱 P1・P3は主柱であると推定されるが、何本柱の構造であったか不明である。

中央ピット 推定される住居の規模から、中央ピットはP2と推定される。

遺 物 頭100・101が出土している。100は埋土中で、101はP5内より出土した。埋土中よりF15鋳造鉄斧の側片部が出土している。

時 期 出土遺物などから、清水編年V-3期頃、濱田編年V-3期頃に相当し、弥生時代後期後葉頃に比定されよう。



第24図 堅穴住居10遺構・遺物図

遺構・ピットNo.		長辺×短辺×深さ(cm)			柱穴間距離(cm)		
堅穴住居10							
主柱	P1	40	×	30	—	10	
	P2	40	×	30	—	20	
	P3	30	×	30	—	10	
	P4	60	×	60	—	30	
	P5	70	×	60	—	50	
中央ピット							

表7 堅穴住居10ピット表

堅穴住居11・12（第5図）

調査区の北側、堅穴住居7の西と東で確認された。未調査地区にかかるため調査はおこなっていない。住居11・12の検出で、住居群が北側へ広がることが明確となった。

第2節 堀立柱建物跡

掘立柱建物1 (第25図、図版1)

位 置	調査A区のほぼ中央、標高94.0mで検出した。
形 態	P1～P4の柱穴で、梁行1間×桁行1間の建物と考えられるが、建物の南側を竪穴住居2で壊されている、梁行1間×桁行2間以上の建物とも推定される。
規 模	主軸はN-66°-Eをとり、梁行長1.6m×桁行長2.2mを測る。また、梁行1間×桁行2間の建物ならば、梁行長2.2m×桁行長2.5m以上を測る建物となる。
遺 物	遺物の出土は無い。
時 期	時期は不明であるが、梁行1間×桁行2間の建物ならば、竪穴住居2との切り合い関係より、竪穴住居2より古い掘立柱建物である。

掘立柱建物2 (第25図、図版3)

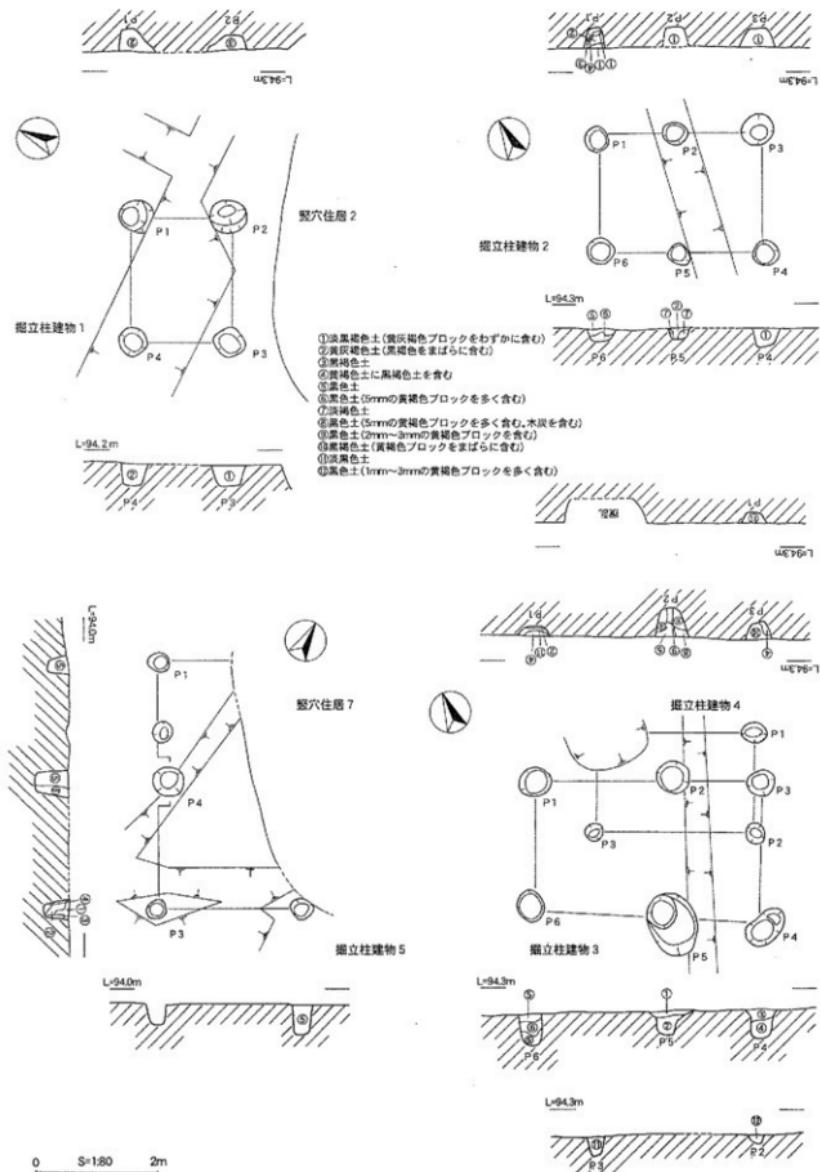
位 置	調査B区の東隅、標高94.0mで検出した。
形 態	P1～P6の柱穴で、梁行1間×桁行2間の建物である。
規 模	主軸はN-28°-Eをとり、梁行長1.8m×桁行長2.7mを測る。柱穴間距離は桁行で1.3-1.4mである。
遺 物	遺物の出土は無い。
時 期	時期は不明である。

掘立柱建物3 (第25図、図版3)

位 置	調査B区の南側、標高93.8mで検出した。
形 態	P1～P6の柱穴で、梁行1間×桁行2間の建物である。
規 模	主軸はN-21°-Eをとり、梁行長2.0～2.4m×桁行長3.7mを測る。柱穴間距離は、桁行長で2.2-1.5mである。
遺 物	遺物の出土は無い。
時 期	時期は不明である。

掘立柱建物4 (第25図、図版3)

位 置	調査B区の南側、標高93.8mで検出した。
形 態	P1～P4の柱穴で、梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴のうちP1を欠く。
規 模	主軸はN-22°-Eをとり、梁行長1.7m×桁行長2.6mを測る。
遺 物	遺物の出土は無い。
時 期	時期は不明である。掘立柱建物3と北東側で重なるように建てられている。掘立柱建物3と4の新旧関係も不明である。



第25図 建柱建物 1～5 違構図

掘立柱 建物1	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	1間 × 1間	P 1	64 × 56	— 40
		P 2	64 × 56	— 24
	160 × 220	P 3	56 × 48	— 32
掘立柱 建物2	160 × 210	P 4	48 × 40	— 36
	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	1間 × 2間	P 1	44 × 36	— 32
	180 × 260(130-140)	P 2	40 × 36	— 32
掘立柱 建物3	180 × 260(130-140)	P 3	60 × 48	— 32
		P 4	44 × 40	— 32
		P 5	36 × 36	— 20
		P 6	48 × 44	— 20
掘立柱 建物4	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	1間 × 1間	P 1	42 × 32	— 30
		P 2	34 × 24	— 16
	170 × 260	P 3	28 × 29	— 13
掘立柱 建物5	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	1間 × 1間	P 1	36 × 32	— 32
		P 2	34 × 32	— 48
	240 × 400(210-190)	P 3	32 × 32	— 40
掘立柱 建物6 (布掘り)		P 4	50 × 44	— 56
	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	1間 × 1間・2間	P 1	56 × 34	— 58
	230 × 330	P 2	56 × 32	— 56
掘立柱 建物7 (布掘り)	230 × 370(220-150)	P 3	54 × 48	— 52
	200 × 320(160-180)	P 4	60 × 48	— 30
		P 5	56 × 47	— 54
		P 6	72 × 60	— 56
	梁行 × 柱行 (cm)	柱穴	長軸 × 短軸	深さ(cm)
	南側裏方	848	× 16~46	—
	北側裏方	104	× 30~44	—

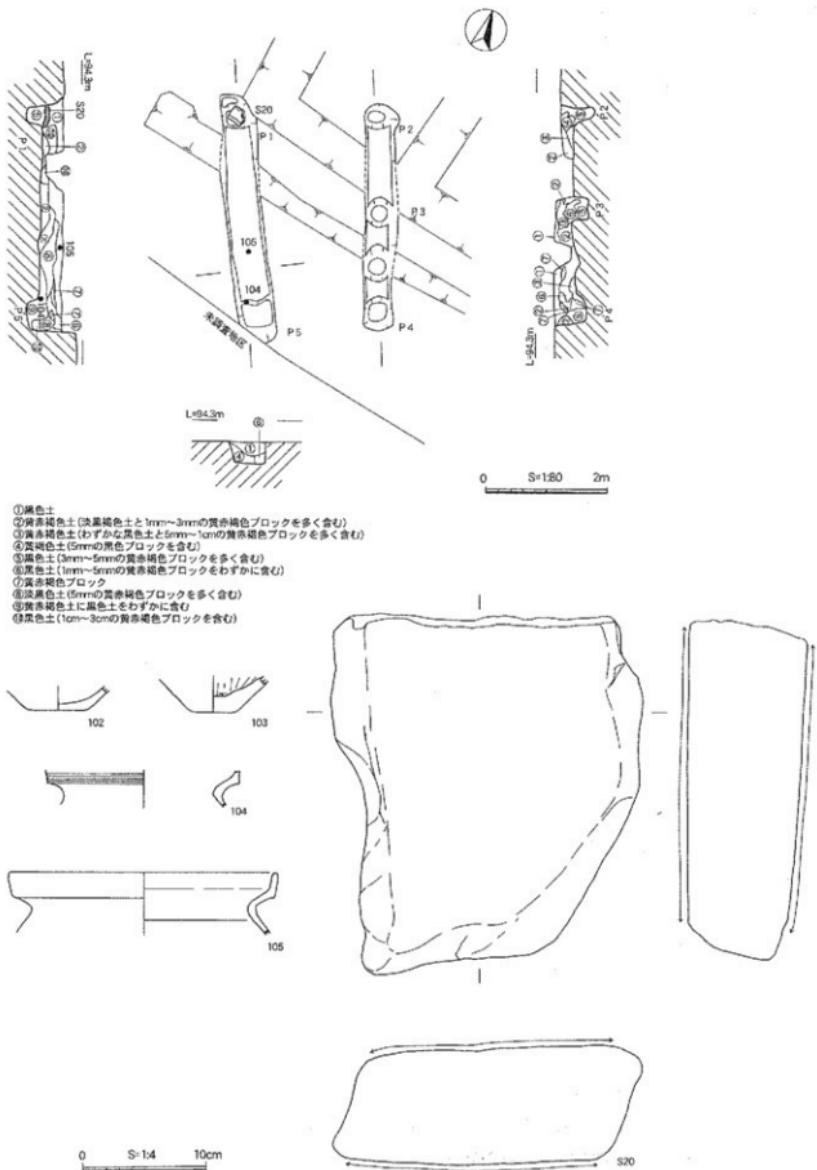
表8 掘立柱建物1～7ピット表

掘立柱建物5 (第25図、図版3・11)

- 位 置 調査B区の北側、標高93.8mで検出した。
- 形 態 P 1～P 6の柱穴で、梁行1間×桁行2間の建物と考えられるが、建物の北東側を堅穴住居7で塗されている、梁行2間×桁行2間以上の建物とも推定される。
- 規 模 主軸はN-62°-Eをとり、梁行長2.4m×桁行長4.1mを測る。柱穴間距離は妻通長で、2.0-2.1mである。また、梁行2間×桁行2間以上の建物ならば、梁行長4.1m×桁行長2.4m以上を測る。柱穴間距離は、梁行長2.0-2.1m、桁行2.4m以上である。
- 遺 物 遺物の出土は無い。
- 時 期 時期は不明であるが、堅穴住居7との切りあい関係より、堅穴住居7より古い時期の建物である。

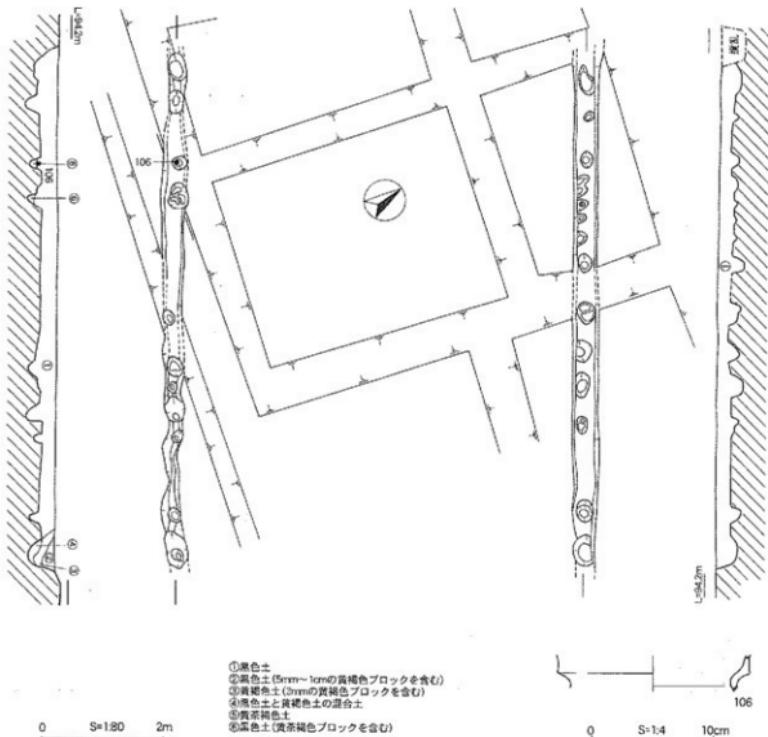
掘立柱建物6 (第26図、図版4)

- 位 置 調査B区の南側、標高94.0mで検出した。
- 形 態 布掘りの建物で、西側溝中に柱穴を2本、東側溝では柱穴痕を4本検出した。溝は軸を北西・南東方向に振り、北側で2.3m、南側で2.0mを測る梁間1間×桁行3間の建物である。
- 規 模 主軸はN-34°-Eをとり、梁行長2.0-2.3m×桁行長3.3mを測る。柱穴間距離は桁行長で、1.6-0.9-0.8mである。
- 特 徴 P 1よりS20を検出した。断面観察の結果、埋土の堆積状況などからS20は礎盤として利用されたものと推定される。
- 遺 物 埋土中より、甕底部102・103と口縁部104・105が出土した。102・103は平底である。104の口縁部外縁には凹線が施される。
- 時 期 遺物などより、清水編年V-3、濱田編年V-3に相当し、弥生時代後葉に比定されよう。



第26図 捜立柱建物 6遺構・遺物図

掘立柱建物 7	(第27図、図版4・11)
位 置	調査B区の南東側、標高94.0mで検出した。
形 態	布堀りの建物で、2条の溝から柱穴を検出した。溝は軸を東西方向に振り、北側で8.2m、南側で8.6mを測り、溝から溝までの距離は6.7mを測る建物である。溝は東西を搅乱で壊されているため、本来の形態を確認することはできなかった。
規 模	主軸はN-34°-Eをとる。溝幅40cm、遺構検出面からの深さは30cmを測る。溝の中に掘り込まれたビットは、幅10~60cm、深さ10~15cmを測り、ビット間の距離は不規則である。
特 徴	溝を検出した状態の平面観察では、ビットの確認はできず埋土①層(黒色土)のみであった。断面観察のベルトを東西に設定していなかったので、溝を掘り下げた時点でのビット観察しかできなかった。ビットの埋土は①層で、溝との色相差は確認できなかった。溝の両端は構成の搅乱によって壊されている。南北方向にも溝が巡る方形の壁立建物になる可能性も推定されるが、区画施設としての柵列状遺構の可能性も考えられる。
遺 物	ビット内より、斐106の出土があった。
時 期	遺物や周囲の遺構のありようから、弥生時代後期後葉頃に比定されよう。



第27図：掘立柱建物 7 遺構・遺物図

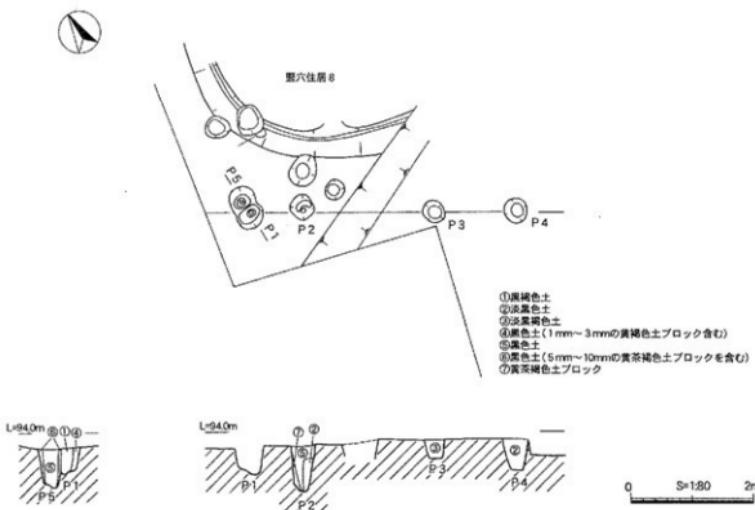
第3節 構造遺構

構造1 (第28図、図版2)

- 位置 調査B区の北西隅、竪穴住居8の南側の標高94.0mで検出した。
- 形態 P1～P4を利用した柱穴である。それぞれのビットが、深さのあるしっかりした柱穴であったこと、東西方向に並ぶことなどから構造と推定した。このほか、周囲にも深さのあるしっかりした柱穴が検出されていることから、何列かの構造遺構が建てられていた可能性も想定される。
- 規模 P1～P4は4.3mを測り、柱穴間距離はP1より0.9-2.1-1.3mである。この構造は、西側の未調査地区へ延びる可能性をもつ。
- 遺物 遺物の出土は無い。
- 時期 時期は不明である。

構造1	全長 440cm	柱穴	長軸	×	短軸	—	深さ(cm)
		P1	72	×	46	—	48
	P2	40	×	40	—	80	
	P3	37	×	32	—	32	
	P4	40	×	40	—	50	

表9 構造1ビット表



第28図 構造1遺構図

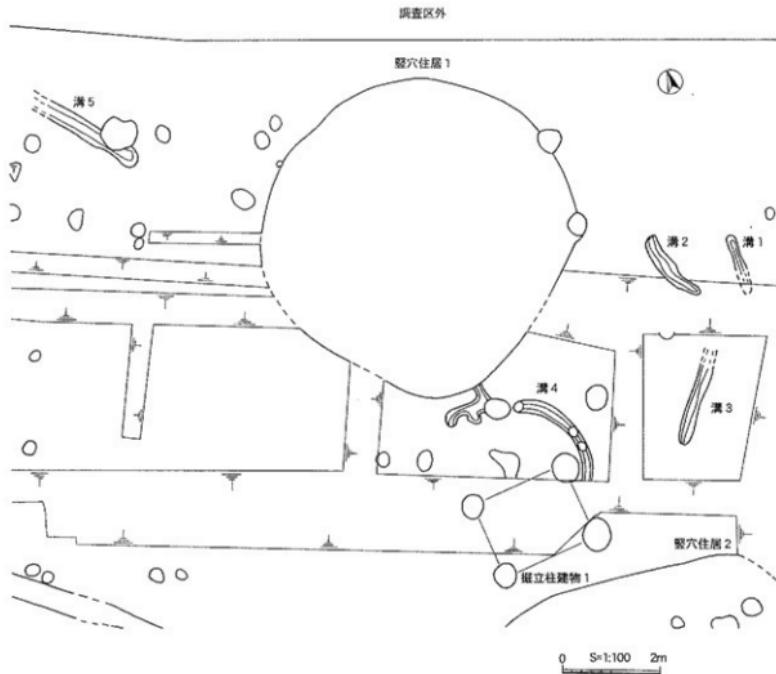
第4節 溝状遺構

溝1～4（第29図）

- 位 置 調査A区、竪穴住居1の南東側で検出した。
- 規 模 溝1は幅16～18cm、長さ134cm、深さ4～8cmを測る。
溝2は幅11～30cm、長さ152cm、深さ10cmを測る。
溝3は幅22cm、長さ171cm、深さ4～7cmを測る。
溝4は半円形状で、幅18～24cm、長さ226～260cm、深さ4cmを測る。
- 遺 物 溝1～4では、いずれの遺構からも遺物の出土は無い。
- 時 期 溝1～4の時期は不明である。

溝5（第29図）

- 位 置 調査A区、竪穴住居1の北西側で検出した。
- 規 模 幅34～37cm、長さ220cm、深さ12～16cmを測る。
- 遺 物 遺物の出土は無い。
- 時 期 溝の時期は不明である。



第29図 溝1～5遺構図

第4章 自然科学分析

第1節 喜多原第5遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴式住居跡より出土した炭化材1点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（粧目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

試料はコナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

横断面：薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列し、大型の広放射組織と単列の放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。なおコナラ属コナラ節は、大型の道管が存在する環孔材であるが、本試料は小片の為、大型の道管は観察出来なかった。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

5. 所見

同定の結果、喜多原第5遺跡の炭化材は、コナラ属コナラ節であった。コナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帶落葉広葉樹林の主要構成要素や暖温帶性のナラガシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。生態的にはコナラが考えられ、二次林化した遺跡周辺からもたらされたと考えられる。

参考文献 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総観、雄山閣、p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p. 242

第2節 喜多原第5遺跡における放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から曆年代に較正する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	S102, No. 311	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	S104, No. 252	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 3	S107, No. 434	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	曆年代 (西暦) ⁴⁾
No. 1	225127	2090±40	-24.4	2100±40	交点: cal BC 150, BC 140, BC 110 1 σ : cal BC 180~50 2 σ : cal BC 340~330 cal BC 200~30
No. 2	225128	2130±40	-25.5	2120±40	交点: cal BC 170 1 σ : cal BC 200~90 2 σ : cal BC 350~300 cal BC 210~40
No. 3	225129	2120±40	-27.9	2070±40	交点: cal BC 60 1 σ : cal BC 160~40 2 σ : cal BC 190~ AD 10

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, BC: 紀元前, AD: 紀元後

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年代。

(4) 历年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値（歴年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。歴年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10450年まで）。

歴年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の歴年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 では、 2100 ± 40 年BP (1 σ の歴年代でBC 180~50年)、No. 2 では 2120 ± 40 年BP (同BC200~90年)、No. 3 では 2070 ± 40 年BP (同BC160~40年) の年代値が得られた。

参考文献

Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul Blackwell, Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry McCormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmelt, John R Soutter, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FW Taylor, Johannes van der Plicht, Constance E Weyhenmeyer. 2004. INTCAL04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon 46:1029-1058.

尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ、学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－、p. 14-15。

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p. 1-36。

喜多原第5遺跡の炭化材



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.4mm 接線断面 ━━━━ : 0.4mm
1. 炭化材 コナラ属コナラ節

第5章 調査の総括

今回実施した喜多原第5遺跡の調査は、県立喜多原学園の既存の施設を取り除いた削平地を調査するもので、当初は造構の破壊が著しいものと推定されていたが、調査の結果、保存状態の良い竪穴住居跡を含む弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡であることが確認された。造構は竪穴住居跡12棟、掘立柱建物跡7棟、溝状造構5、柵列状造構1である。

竪穴住居跡12棟の内2棟（竪穴住居11・12）は、調査区域外にかかるため未調査である。これら竪穴住居の検出状況から推定して、喜多原第5遺跡の集落は北西の尾根へ広がるものと考えられる。

調査範囲の北東側は学園施設建設時に大きく掘削されているため、造構の広がりは無いものとみられる。また、南東隅で確認した竪穴住居3・4・5・の状態から、遺構の範囲は南東方向へ延びていたものと推定され、主要地方道米子・大山線を挟み確認されている「岡成弟9遺跡」と一連の集落跡であると考えられる。

第1節 竪穴住居跡

喜多原第5遺跡に立ち淀江平野を望むと、北東に弥生時代の大集落妻木晚田遺跡が存在し、北西には古墳時代後期に300棟以上の竪穴住居と群集墓群を形成した百塚遺跡をみることができる。これら二つの遺跡と喜多原第5遺跡は、丘陵上で暮らした人々が、時代が下るに従い平野へ近い丘陵の先端部へ移動し、集落群を形成することをうかがうことのできる遺跡である。

このことは、大山西麓の丘陵上に立地する妻木晚田遺跡と喜多原第5遺跡の立地する標高からも推察される。妻木晚田遺跡では、弥生時代後期に集落が形成され、後期の中頃以降爆発的に住居群が作られるが、その居住域は標高100m前後の丘陵上に展開される。これと同じように、喜多原第5遺跡も弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の住居群が、標高90m前後に作られている。その後、空白を経て、標高30m前後の台地上にある百塚遺跡群に居住域が展開されることからも、集落の動向を知ることができる。

今回の喜多原第5遺跡の調査結果から、大山山麓周辺では、弥生時代後期中頃以降丘陵上に展開されていた居住域が、その後古墳時代に入るとより低い丘陵の台地上へ移り、さらに時代が下ると平野に近い丘陵の先端部へと移行するという変化がよみとれる。

淀江平野周辺における古墳時代前期初頭の集落遺跡の確認はまれで、激動から安住へと当時の人々が展開した暮らしの痕跡が、妻木晚田遺跡（弥生時代後期）からは百塚遺跡（古墳時代後期）へ繋がる中で、喜多原第5遺跡の弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居の検出は貴重な資料のひとつとなろう。

さて、竪穴住居2より検出した炭化材の樹種同定により、「コナラ属コナラ節で生態的にはコナラが考えられる」という分析結果を得ることができた。（第4章参照）その結果にある、「二次林化した遺跡周辺からもたらされたと考えられる」という指摘から推察して、喜多原第5遺跡周辺の往時の環境は、カンバ類やマツ類の樹木が生育する林の中にクヌギやコナラなどの雜木林が成長し、カンバ類やマツ類の樹木にかわりつつある森林であったといえよう。同様に弥生時代の暮らしがあった妻木晚田遺跡では、常緑広葉樹のスダジイや落葉広葉樹のクリ・ケヤキなどが同定されていることから、二次林化した林が広がっていたことが伺える。また、米子市内にある諏訪西山ノ後遺跡（弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の集落跡出土）からも、分析の結果、コナラ属コナラ節・コナラやクリ、

ヤマグワなどが検出され、建築材と利用されていたことが指摘されている。⁽⁸⁵⁾

コナラは、強韌で弾力性に富むことから、喜多原第5遺跡周辺で調達できる利用頻度の高い建築材として活用されていたと推定される。また、コナラの実は長期貯蔵にも適することから、食料として蓄えられていたとも推察される。

放射炭素年代測定では、竪穴住居2の炭化材からBC180~50、竪穴住居4の炭化材からBC200~90、竪穴住居7の炭化材からBC160~40という測定結果を得た。この測定結果は、竪穴住居出土の遺物から想定される年代と大きくずれる結果となった。(第4章第2節参照)

このほか、同遺跡で特筆される竪穴住居としては、鉄製品の破片が多く出土した竪穴住居8があげられる。住居内からは大形鉄製品の破碎片と考えられるものがみられ、埋土内には多くの炭化材の細片が混入していた。床面上の埋土は焼土による広がりで覆われ、床面の赤く焼けた被熱面がその痕跡を残していた。また、台石S15・S18、砥石S16などは鍛冶具ではないかと推察される。近年、県内の遺跡からも鍛冶工房と推定される住居の検出例が増加しているが、遺物の出土状況などを考え合わせれば、竪穴住居8は鉄器製作に関わる鍛冶関連遺構ではないかと推定される。

第2節 挖立柱建物跡

喜多原第5遺跡では、布掘りの掘立柱建物跡を2棟検出した。掘立柱建物6・7である。布掘りの掘立柱建物は、全国でその例を見ることができるが、石川県近岡遺跡では布掘りした溝に、長さ5m超を超える枕木が柱の沈下を防ぐ目的を持って据付けられていた。現代の建築方法で用いられる用語「布掘り」は「布基礎」とも呼ばれ、建物の加重を均等に逃がすために掘り込まれるとされている。さらにしっかりした地盤（地耐力がある）ではあまり深く掘りすぎると、埋め戻したときに地耐力が落ちてしまうといわれ、必要以上に掘らないことが常識となっている。現代の建築技術からうかがえる布掘りの特徴は、今後、布掘り建物の構造を考える上で考慮する点であろう。

布掘り建物は、遺跡内から検出される掘立柱建物の数と比較するとその数が少ない。鳥取県・島根県内における布掘り建物の類例（第30・31・32図、表9・10参照）を一覧にした。布掘り建物にはさまざまな平面構造をしたものがあることから、今回は、基本的な構造（溝の中に柱を建てるもの）をピックアップして資料とした。

これらの資料と比較しても、喜多原第5遺跡で検出された掘立柱建物6は、布掘り建物の代表的な平面構造をもつ建物であるといえよう。しかし、掘立柱建物7とした建物は溝の両端が搅乱によって確認できないため、方形に溝が巡る平面構造の建物跡とも推定される。この構造は、近年壁立ち建物として注目されているものである。⁽²⁷⁾

一般的に考えられている掘立柱建物の機能としては、住居・祭儀・工房・倉・櫓などが想定されているが、遺跡内から検出される掘立柱建物の中にあって検出例の少ない布掘り建物は、集内における機能の特殊性を示す建物ではないかと考える。

布掘り建物の性格（=機能）をうかがい知るものとして、湯梨浜町（旧羽合町）の長瀬高浜遺跡で検出された大型の布掘り建物がある。報告書によれば、「SB40が複雑な施設を持つ巨大な高床建物であるのに対し、SB30がそれより古く、簡素であるということは、SB30はSB40築造前に、その役割を果たした建物であろうか」という示唆に富む指摘がなされている。つまり、集落内に重要な「場」に建てられていた巨大高床建物が特殊な機能をもつ建物だとすれば、それ以前に同じ場所に建てられた布掘り建物も同様に特殊な機能を持った建物であるという解釈である。

この推論を採用するならば、喜多原第5遺跡において、隣接する掘立柱建物6・7もその周囲を堅穴住居が囲むように建てられていることから、前期の事例と同様に建物の特殊性を現しているものといえよう。今回は調査範囲が限られていたため、喜多原第5遺跡の全体像をつかむことは困難であったが、布掘り建物を中心として集落が広がっているという可能性を指摘しておきたい。

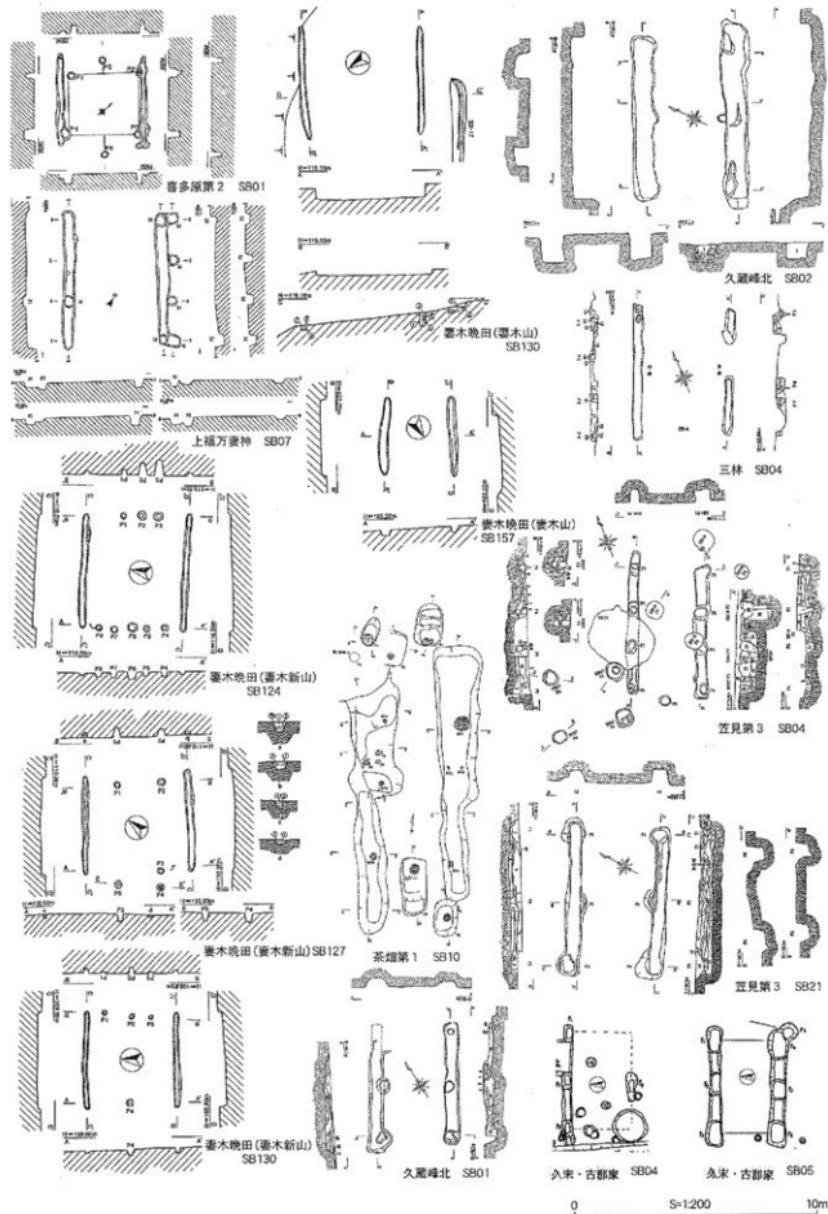
今後、各地で調査が進み検出例が多くなるに従い、布掘り建物の性格も解明されてくるものと考えられるが、遺跡内での居住空間、貯蔵空間、祭祀空間を考える上で、布掘り建物のありかたは1つの手がかりとなろう。

今後の発掘調査では、今回の喜多原第5遺跡の調査で得られた成果や課題を踏まえ、大山周辺の弥生時代後期から古墳時代前期の集落の様相を解明していきたい。

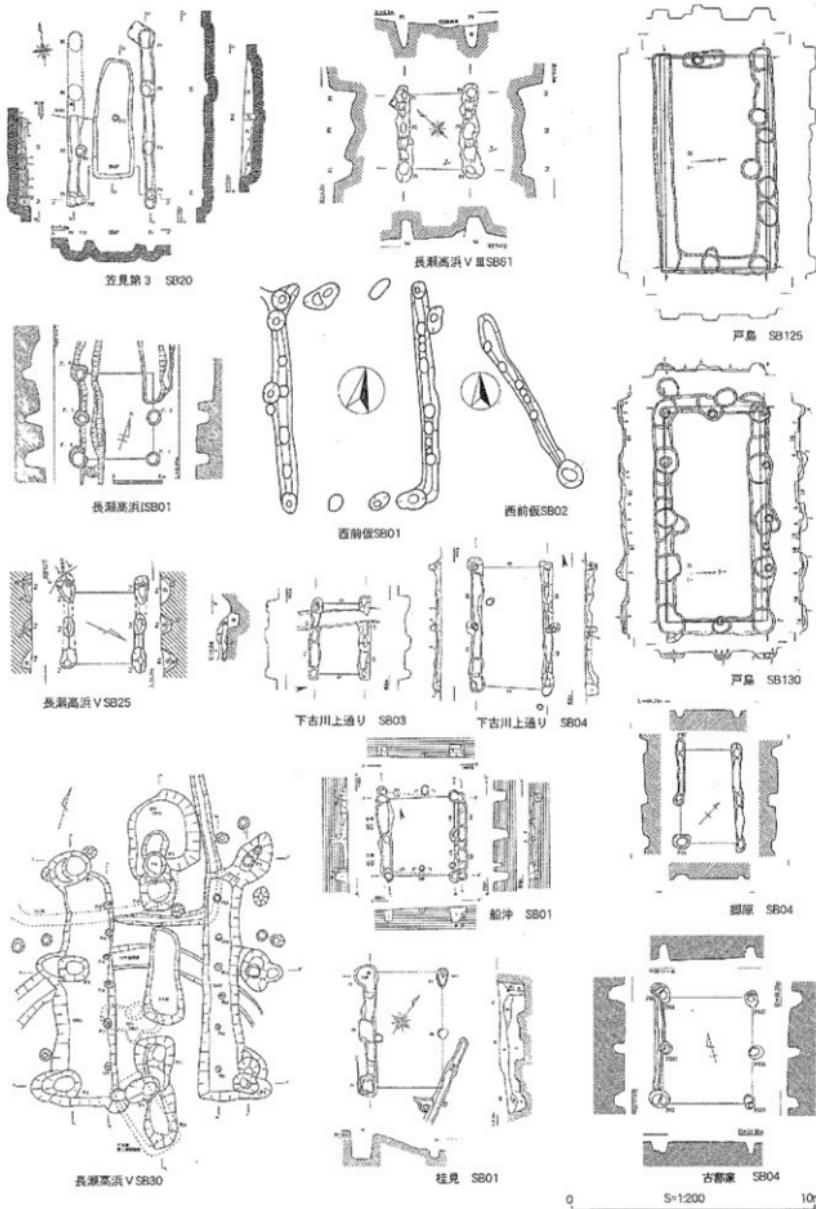
最後に、調査・報告書作成にあたり多くの方のご指導を仰ぎました。記してお礼申します。

参考文献

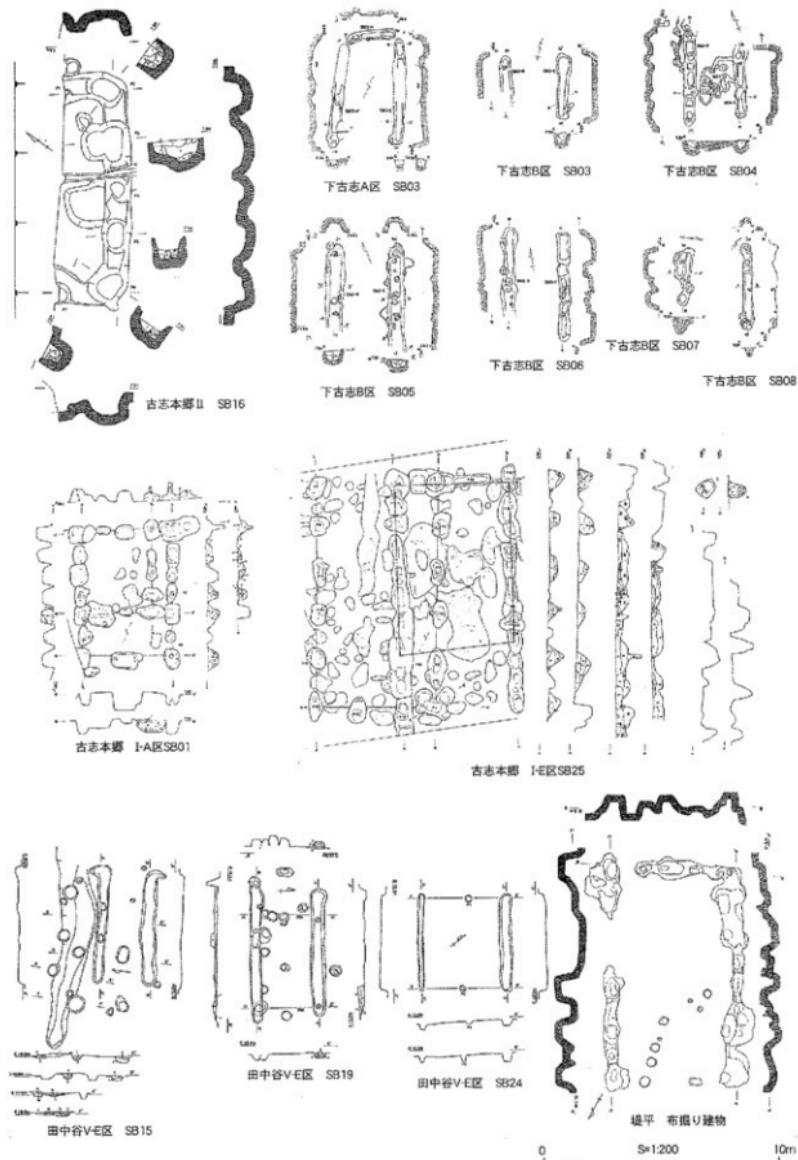
- 註1 高尾浩司 2003年「妻木晚田遺跡における鉄器生産の一試論」『妻木晚田遺跡発掘調査研究年報2002』 烏取県教育委員会
- 註2 高田健一 2003年「妻木晚田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晚田遺跡発掘調査研究年報2002』 烏取県教育委員会
- 註3 植田弥生 2003年「妻木晚田洞／原地区西側丘陵から出土した炭化材の樹種同定」
『妻木晚田遺跡第4次発掘調査報告書』 烏取県教育委員会
- 註4 植田弥生 2006年「妻木晚田遺跡妻木山5区・7区住居跡出土炭化材の樹種同定」
『史跡妻木晚田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』 烏取県教育委員会
- 註5 古環境研究所 2006年「諏訪西山ノ後遺跡における樹種同定」『諏訪西山ノ後遺跡』 米子市教育文化事業団
- 註6 2000年『近岡遺跡発掘調査報告書』石川県埋蔵文化財センター
- 註7 花田勝弘 2000年「大壁建物集落と渡来人(上)」・「大壁建物集落と渡来人(下)」 古代文化
- 註8 岩崎直也 1991年「弥生時代の建物」『弥生時代の掘立柱建物』 埼玉文化財研究会
- 註9 浅川滋雄 1998年 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 註10 清水真一他編 1983年『長瀬高浜遺跡発掘報告書V』 烏取県教育文化財団



第30図 烏取県内布掘り建物遺構図 1



第31図 鳥取県内布掘り建物遺構図 2



第32図 島根県内布掘り建物造構図

表10 鳥取県内布掘り建物一覧

1

遺跡名	遺構	規模(梁×桁(cm))	柱穴距離	時期	遺物	標立 総数	竪穴 総数	標高	備考
喜多原 第2遺跡	S B 01	1間×1間		弥生中期～ 後期	有	6	2	101.9	米子市喜多原第 2遺跡発掘調査 報告書1987.3
		300×420							
		P 1 (32×32-38)	P 1～2-280						
		P 2 (26×34-59)	P 2～3-310						
		P 3 (32×34-55)	P 3～4-270						
		P 4 (38×56-47)	P 4～1-320						
上福万 妻神遺跡	S B 07	305×32-45)	梁間からの距離60	不明	有	8	2	63.8	鳥取県米子市上 福万妻神遺跡 1991.3
		1間×3間							
		385×490							
		P 1 (43×55-38)							
		P 2 (35×48-27)							
		P 3 (34×50-43)							
		P 4 (47×44-27)	P 4～5-170						
		P 5 (38×44-25)	P 5～6-165						
妻木晚田遺跡 (妻木新山)	S B 124	P 6 (40×40-26)	P 6～7-165	不明	有	8	2	63.8	大山町埋蔵文化 財調査報告書 第17集 2000.3
		420×490							
		P 1 (24×24-23)	P 1～2-77						
		P 2 (34×48-50)	P 2～3-67						
		P 3 (34×40-65)							
		P 4 (29×30-25)	P 4～5-78						
		P 5 (29×29-18)	P 5～6-56						
		P 6 (37×41-31)	P 6～7-76						
		P 7 (27×30-25)	P 7～8-60						
		P 8 (25×25-18)							
妻木晚田遺跡 (妻木新山)	S B 127	420×430		不明	有	152	88	110.1	大山町埋蔵文化 財調査報告書 第17集 2000.3
		P 1 (26×30-40)	P 1～2-184						
		P 2 (32×34-30)							
		P 3 (26×30-32)							
		P 4 (32×30-41)	P 4～5-178						
		P 5 (30×34-30)							
		392×404							
		P 1 (20×22-9)	P 1～2-114						
		P 2 (18×28-28)	P 2～3-82						
		P 3 (19×22-10)							
妻木晚田遺跡 (妻木山)	S B 130	P 4 (30×30-22)		不明	有	217	156	118.5	大山町埋蔵文化 財調査報告書 第17集2000.3
		360×466							
S B 157		248×332		弥生終末期	有	217	120	118.5	大山町埋蔵文化 財調査報告書 第17集2000.3
茶畠第1遺跡	S B 110	360×1080		弥生中期後葉 ～終末期	有	36	22	56.2	鳥取県教育文化 財団調査報告書 93 2004
久戸峰北遺跡	S B 01	300×490(推定)		弥生後期前葉	有	14	65	64.9	鳥取県教育文化 財団調査報告書 89 2004
		470×750							
三林遺跡	S B 04	1間×3間 380×480		弥生終末期	有	5	51	64.3	鳥取県教育文化 財団調査報告書 88 2004
		P 1 (柱直徑14-32)	P 1～2-130						
		P 2 (柱直徑16-28)	P 2～3-180						
		P 3 (柱直徑22-32)	P 3～4-160						
		P 4 (柱直徑15-24)	P 4～5-150						
		P 5 (柱直徑18-44)	P 5～6-310						
		P 6 (柱直徑16-32)	P 6～7-50						
久末・古都家 遺跡	S B 04	P 7 (柱直徑17-32)		弥生後期後葉	有	6	0	-167 (0点 =36)	鳥取市文化財 報告書I 1974
		P 1 (70×35-35)	P 1～2-185						
		P 2 (66×35-28)	P 2～4-250						
		P 3 (68×40-41)	P 2～3-187						
	S B 05	P 4 (●×30-25)							
		P 1 (58×34-30)	P 1～4-250	有	有	6	0	-181 (0点 =36)	鳥取市文化財 報告書I 1974
		P 2 (88×40-37)	P 2～5-242						
		P 3 (100×78-43)	P 3～6-242						
		P 4 (120×82-35)	P 1～2-175						
		P 5 (84×58-56)	P 2～3-184						
		P 6 (108×74-43)	P 4～5-188						
		P 7 (柱直徑17-32)	P 5～6-165						

遺跡名	遺構	規模(梁×桁(cm))	柱穴間距離	時期	遺物	掘立 基數	竪穴 總數	標高	備考
笠見第3遺跡	S B 04	1間×3間 梁行約280		弥生後期中葉	有	74.1			鳥取県教育文化 財団調査報告書 86 2004
		P 1	P 1~2-170						
		P 2 (60×62-13)	P 2~3-150						
		P 3 (46×55-10)	P 3~4-170						
		P 4 (36×48-7)	P 5~6-180						
		P 5 (26×36-7)	P 6~7-170						
		P 6 (32×34-10)	P 7~8-160						
		P 7 (43×58-8)	P 8 (18×22-8)						
		P 9 (43×47-126)							
	S B 20	1間×3間 310×680		古墳前期前葉	有	71.5			鳥取県教育文化 財団調査報告書 86 2004
		P 1							
		P 2 (59×68-16)							
		P 3							
		P 4 (42×43-8)							
		P 5							
		P 6							
		P 7 (36×●-●)							
		P 8 (50×54-10)							
		P 9 (44×49-30)							
		P 10 (45×50-10)							
		P 11 (26×26-50)							
長瀬高浜遺跡 I	S B 01	1間×2間 304×351		古墳前期末	有	5	6	5.1	鳥取県教育文化 財団調査報告書 3 1980
		P 2 (57×63-49)	P 1~2-280						
		P 3 (55×57-54)	P 2~3-260						
		P 4 (77×80-80)	P 4~5-270						
		P 5 (65×66-66)	P 5~6-270						
		P 6 (70×68-71)							
長瀬高浜遺跡 V	S B 25	1間×2間 288×300		古墳中期中葉以 降	有	3.7			鳥取県教育文化 財団調査報告書 12 1983
		P 1 (54×118-59)	P 1~2-168						
		P 2 (44×88-43)	P 2~3-152						
		P 3 (54×104-58)	P 3~4-292						
		P 4 (64×84-40)	P 4~5-148						
		P 5 (44×88-29)	P 5~6-168						
長瀬高浜遺跡 Ⅴ	S B 30	P 6 (72×120-53)	P 6~1-304	長瀬 I 期	有	5.5			鳥取県教育文化 財団調査報告書 12 1983
		2間×2間 748×929	P 1~2-464						
		P 1 (145×250-140)	P 2~3-485						
		P 2 (175×172-149)	P 3~4-388						
		P 3 (103×160-157)	P 4~5-360						
		P 4 (91×151-149)	P 5~6-480						
		P 5 (148×207-158)	P 6~7-440						
		P 6 (105×217-148)	P 5~6-168						
長瀬高浜遺跡 Ⅵ	S B 61	P 7 (135×182-83)	P 6~1-304	古墳前期前半	有	3.6			鳥取県教育文化 財団調査報告書 61 1999
		P 8 (98×109-44)	P 7~8-352						
		1間×2間 270×320	P 8~1-388						
		P 1 (40×54-76)	P 1~2-170						
		P 2 (24×43-81)	P 2~3-140						
		P 3 (26×33-108)	P 3~4-270						
		P 4 (38×44-100)	P 4~5-150						
		P 5 (45×68-67)	P 5~6-180						
		P 6 (33×46-65)	P 6~1-270						

遺跡名	遺構	規模(梁×桁(cm))	柱穴間距離	時期	遺物	掘立柱數	竪穴柱數	標高	備考
長谷遺跡	S B12	1間×1間 290×336 271×313		不明		16	2	99.3 99.1	倉吉市文化財調査報告書第76集 1993
	S B16	1間×2間 288×318×504-527		不明					
西前遺跡	仮S B01	3間×6間 620×880		7世紀後半頃		24	83	7.7	倉吉市文化財調査報告書第51集 1988
	仮S B02	柱間數不明		7世紀後半頃					
一反半田遺跡	S B01	1間×2間 340×650		不明		1	0	35.4	倉吉市文化財調査報告書第37集 1985
下古川上通り遺跡	S B03	1間×2間 200×290		不明		6	1	7.7 7.4	倉吉市文化財調査報告書第125集 2006
	S B04	1間×2間 290×510 300×490		不明	有				
船沖遺跡	S B01	2間×2間			有	11	9	50.7	倉吉市文化財調査報告書第111集 2001
桂見遺跡	S B01	1間×2間 300×460							
		P 1 (85×100-116)	P 1 ~ 2 - 230						
		P 2 (70×90-88)	P 2 ~ 3 - 230						
		P 3 (80×90-72)							
		P 4 (46×80-39)	P 1 ~ 4 - 300						
		P 5 (40×42-48)	P 4 ~ 5 - 240						
戸島遺跡	S B120 旧	2間×4間 420×840	梁行210 桁行210	不明				20.2	
	S B120 新	2間×4間 390×840	梁行195 桁行210	不明					
	S B125 旧	2間×4間 430×860	梁行215 桁行215	不明				20.4	
	S B125 新	2間×4間 400×840	梁行200 桁行210	不明					
	S B130 旧	2間×4間 390×840	梁行195 桁行210	不明				20.4	
	S B130 新	2間×4間 390×840	梁行195 桁行210	不明	有				
	S B135 旧	2間×4間 480×900	梁行240 桁行225	不明				20.4	
	S B135 新	2間×4間 450×900	梁行225 桁行225	不明					
	S B140 旧	2間×4間 420×840	梁行210 桁行210	不明				20.5	気高町文化財 報告書 第16集 1988
	S B140 新	2間×4間 420×840	梁行210 桁行210	不明			0		
	S B145 旧	2間×4間 440×860	梁行215 桁行220	不明				20.4	
	S B145 新	2間×4間 420×860	梁行210 桁行215	不明					
	S B150 旧	2間×4間 440×860	梁行220 桁行215	7世紀後半頃	有			20.4	
	S B150 新	2間×4間 440×860	梁行220 桁行215	不明	有				
	S B155 旧	2間×4間 410×855	梁行205 桁行213	不明				20.1	
	S B155 新	2間×4間 410×855	梁行205 桁行213	不明	有				
	S B160 旧	2間×4間 420×840	梁行210 桁行210	不明	有			19.8	
	S B160 新	2間×4間 420×840	梁行210 桁行210	不明					
郷原遺跡	S B04	1間×2間 梁行2.32~2.42 桁行3.82~3.94		弥生?	有	15	6	44.3	河原町埋蔵文化財 調査報告書 第4集 1986

表11 島根県内布掘り建物一覧

遺跡名	遺構	規模(梁×桁(cm))	柱穴間距離	時期	遺物	掘立柱數	竪穴数	標高	備考		
古志本郷遺跡II	SB-16	●×4間 ●×850	200×213	出雲4期以降	有	33	8	7.2~7.3	斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財報告書2001年3月		
		P 2 (120×160-70)	P 2 ~ 3 - 240								
		P 3 (200×200-90)	P 3 ~ 4 - 200								
		P 4 (110×110-●)	P 4 ~ 5 - 200								
		P 5 (130×150-90)	P 5 ~ 6 - 230								
		P 6 (150×160-80)									
下古志遺跡	A区 SB-03	200×445		弥生後期初頭～中葉	有	26	12	8	一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書2001年3月		
	B区 SB-03	240×270		弥生後期前半	有			8			
	SB-04	1間×3間 210×450		弥生後期前半	有			7.9			
	SB-05	250×440		弥生後期前葉	有			7.9			
	SB-06	240×460		弥生後期前葉	有			8.2			
	SB-07	80×240		弥生終末期(草田5期)	有			8.1			
古志本郷遺跡I	SB-08	100以上×360		弥生中期末	有	27	7	8	斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書1999年3月		
	A区 SB-01	2間×7間 400×600		古墳前期(草田7期)	有			7			
	E区 SB-25	500×1050		中世後期初め	有			8.7			
田中谷遺跡	V-E区 SB-15	260×490		草田2期	有	55	6	15.8	法吉団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2002年3月		
	SB-19	260×460		草田2期以降	有			15.1			
	SB-24	360×390	P 1 (30×30-10) P 2 (20×20-30)	不明	有			14.7			
		P 1 ~ 2 - 400									
堤平遺跡	布堀り建物	630×930		8~11世紀頃	有	2	2	38.5	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書82002年2月		

「●」は計測不能値とします。

表12 土器観察表

遺構名 図番号	器種 番号	法量(cm) 取上No.	形態	技法	特徴	
					色調	内: 淡黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
竪穴住 居1 第7回	1	壺底部 52	残存高 4.1 復底径 7.2	底部平底。	外面ハケ目。内面ヘラケズリ。	内: 淡黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	2	甕 19	復口径 15.5 残存高 4.4	複合口縁。口縁下端部は鈍い。口縁端部はふくらみを持ちながら丸く終わる。 口縁外面に10条の平行線が巡る。	口縁部外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	3	甕 35・61	復口径 15.0 残存高 4.3	複合口縁。口縁端部は丸く終わる。 口縁下端部は横に張り丸く終わる。 口縁外面に7条の平行線が巡る。	口縁部外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	4	甕 103	残存高 3.2	複合口縁。口縁下端部は鈍い。	風化の為調整不明。	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	5	甕 55	復口径 16.0 残存高 5.4	複合口縁。口縁下端部は鈍く丸味をもつ。口縁端部は丸く終わる。 口縁端部外面に波状文が巡る。 口縁部、頸部外面に貝殻痕による施文が施される。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ、内面ヘラケズリ。	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	6	甕 38	復口径 20.5 残存高 4.4	複合口縁。口縁下端部は鈍い。 口縁端部は肥厚して丸く終わる。	風化の為調整不明。	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	7	甕 118	復口径 19.4 残存高 9.1	複合口縁。口縁下端部は僅かに下垂し丸く終わる。 口縁端部外面に7条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 肩部外面一部ハケ、内面ヘラケズリ。	内: 黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	8	甕 55	復口径 18.2 残存高 4.5	複合口縁。口縁下端部は僅かに下垂し丸く終わる。 口縁端部は丸く終わる。口縁外面11条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 肩部外面一部ハケ、内面ヘラケズリ。	内: 淡黄褐色 外: 黑色 焼成 胎土 備考
	9	甕 9・11- 15・18	復口径 15.4 残存高 11.4 最大径 18.2	複合口縁。口縁下端部は鈍く、端部は横に伸びて丸く終わる。 口縁端部は外方へ開き、端部はやや角ぼりながら稍上まで丸く終わる。 口縁外面は、平行線を一部ナデケス。 肩部外面、櫛状工具による平行線と斜行線文の施文が施される。	口縁部内外面ナデ仕上げ。内面ナデ後ミガキ。肩部外面ナデ後ミガキ、内面ヘラケズリ。	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
器台	10	器台 6	復口径 18.0 残存高 5.5	受部。口縁下端部端部欠損。 受部は外方へ開き、端部は摘み上げて丸く終わる。 受部外面平行線が巡る。	受部内外面ナデの後ミガキ。	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考

遺構名 図版番号	器種 番号	器 器上No.	法量(cm)	形 態	技 法	特 徴	
壁穴住居1 第7図	11	器台 3	残存高 5.8	受部。口縁下端部は鋭い。	受部内外面ナデ仕上げ。 脚部外面ナデ仕上げ、内面へラケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 黄褐色 外: 黄褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む
		高杯 61	復口径 27.6 残存高 3.4	大きく外方へ開く壠部。 壠部は横み上げて丸く終わる。	壠部ミガキ。 壠部外面ミガキ、内面ナデ仕上げ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む 外面黒斑あり
	13	蓋 30・53	復口径 16.2 残存高 3.4	描み部欠損。 口縁部は「八」の字状に外へ開き、壠部は横に延びて丸く終わる。	蓋部外而ハケメ調整の後ナデ仕上げ、内面ケズリ後ナデ仕上げ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒少し含む
壁穴住居2 第11図	14	壺 177	復口径 17.8 残存高 4.4	直口壺口縁部。「逆八状」に大きく外方へ開き、壠部は横み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒少し含む
	15	壺 215・284 285・288	残存高 11.5	壠部。頭部、肩部外面に木口状工具による刻み目が施される。	壠部外面ナデの後ヨコ方向のハケ目、外面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄赤褐色 外: 淡黄赤褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む 壠部外面黒斑
壁穴住居2 第11図	16	壺 135・307	復口径 18.6 残存高 10.5	複合口縁。口縁下端部は鋭く横に描み出す。 口縁部は直立し、壠部は肥厚して丸く終わる。	口縁部、頭部内外面ナデ仕上げ。 肩部内面へラケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡褐色 外: 淡褐色 良好 やや密。 備考
	17	壺 326	復口径 13.7 残存高 5.5	複合口縁。口縁下端部は鋭い。 口縁部は外方へ開き、壠部は丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頭部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 赤褐色 外: 赤褐色 良好 やや密。 備考 壠部外面黒斑
壁穴住居2 第11図	18	壺 328・337	復口径 18.6 残存高 5.3	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁端部は外へ僅かに開き、描み出して丸く終わる。 口縁下端部に外から中へ向けた穿孔有。	口縁部、頭部内外面ナデ仕上げ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む 頭部外面赤色塗彩
	19	壺 138・309	復口径 27.6 残存高 12.7	複合口縁。口縁下端部は鋭い。 口縁部は「逆八の字状」に外方へ大きく開く。壠部は横み上げて丸く終わる。 口縁部外面2条の平行線。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頭部外面上位タテハケ後ヨコハケ、下位ヨコハケ後不整方向のハケ。 内面ハラケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む 頭部外面赤色塗彩
壁穴住居2 第11図	20	壺 101 160 287 314 328	復口径 20.4 残存高 6.7	複合口縁。口縁下端部は鋭く横に描み出す。 口縁部は外方へ開き、壠部は横み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 肩部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒多く含む 頭部外面赤色塗彩
	21	壺 319・320 321・328	復口径 18.2 残存高 10.0	複合口縁。口縁下端部はやや鋭い。 口縁部は外方に開き、壠部は横み上げて丸く終わる。 肩部外面波状文が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 肩部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1mmの砂粒含む

造構名 図番号	周数 番号	器種 取上No.	法量(cm)	形態	技法	特徴	
						色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
堅穴住 居2 第11- 12回	22	甕	復口径 20.0 残存高 19.0	複合口縫。口縫下端部は鋭い。 口縫部は外方へ開き、端部は摘み上げて丸く終わる。 肩部外面に被状文が巡る。	口縫部内外面ナデ仕上げ。 胴部外面タテハケの後ナデ、 内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
		甕	復胴径 52.0 残存高 42.0 復底径 8.6	倒卵状の腹腔。 底部は平底が残る。	頸部外面ハケメ調整、内面ケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	24	甕	復口径 31.6 残存高 6.6	複合口縫をもつ平底の甕か? 口縫下端部は鋭い。 口縫部は僅かに外方へ開き、端部はナデ上げて肥厚し丸子終わる。	口縫部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 淡褐色 外: 淡褐色 焼成 胎土 備考
		甕	復口径 33.0 残存高 5.9	複合口縫をもつ平底の甕か? 口縫下端部は鋭い。 口縫部は外方へ開き、端部は摘み上げて終わる。	口縫部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	26	甕	復口径 29.5 残存高 21.9	複合口縫をもつ平底の甕。 口縫下端部は鋭い。 口縫部は直立し、端部は摘み上げて丸く終わる。	口縫部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 淡赤黄色 外: 淡赤黄色 焼成 胎土 備考
		甕	101・ 116・ 119・ 152・ 160・ 266・ 287・303・313・ 314・315・322・ 324・325・328	口縫部は僅に外方へ開き、端部は摘み上げて肥厚し丸子終わる。 頸部は張り、外面に被状文が巡る。	口縫部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 淡赤黄色 外: 淡赤黄色 焼成 胎土 備考
	27	高坏	復口径 23.3 残存高 4.4	坏部。	坏内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
		高坏	復口径 20.0 残存高 11.2	深い坏部と短い脚部からなる。 坏部は外方へ開き、端部摘み上げて丸く終わる。 脚部は「八の字状」に外方へ開き端部は摘み出して終わる。	坏部内外面ナデ仕上げ。 脚部外面ハケ調整後ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄赤褐色 外: 淡黄赤褐色 焼成 胎土 備考
	29	小型瓶 形土器	復口径 15.2 復胴径 18.0 底径 10.8 器高 34.6	口縫部は端部で内面に肥厚し、 摘み上げて終わる。 脚部はやわふくらみながら、すぼまり気味の底部へ続く。 脚部下位に一对の環状取っ手が付き、 その下に凸巻が巡る。	口縫部、頸部外面タテハケ調整の後ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。 底部外面ナデ仕上げ、内面横方向のケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 暗黄褐色 焼成 胎土 備考
		甕	復口径 15.0 残存高 4.8	複合口縫。口縫下端部は鋭い。 口縫部は外方へ開き、端部は摘み上げて終わる。	口縫部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、外側ケズリ。	色調	内: 明褐色 外: 明褐色 焼成 胎土 備考
堅穴住 居3 (旧堅穴 住居4) 第13回	30	甕	復口径 14.6 残存高 5.0	複合口縫。口縫下端部は鋭い。 器壁が薄い。 口縫部は端部で外方へ開き、摘み出して丸く終わる。	口縫部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面タテハケの後ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 暗褐色 外: 暗褐色 焼成 胎土 備考
		高坏	復口径 15.5 残存高 4.3	坏部。	風化の済調整不明。	色調	内: 暗褐色 外: 暗褐色 焼成 胎土 備考

渡柄名 図番号	規範 番号	器種 取上No.	法量(cm)	形態	技法	特徴	
						色調	内: 淡褐色 外: 淡褐色
豎穴住居3 (旧豎穴住居4)	33	飯型器台	復口径 237-238 残存高 4.6 13.2	受部は大きく「八の字状」に開き、端部でさらにヨコへ延びる。口縁下端部は鋭い。脚部は内尚気味に外方へ「八の字状」へ開く。	受部内外面ナデ仕上げ。脚部外面ナデ仕上げ、内面風化の為調整不明。	焼成 胎土 備考	密。1mm以下の砂粒を多く含む 脚部外面黒斑
豎穴住居4 (旧豎穴住居5)	34	甕	復口径 206 残存高 15.0 3.5	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ開き、端部は摘み上げて終わる。	風化の為調整不明。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色
	35	甕	復口径 206-203 残存高 14.0 3.7 267-1	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ開き、端部は摘み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 黄褐色
	36	甕	復口径 230 残存高 15.6 3.6	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ開き、端部は摘み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
	37	甕	復口径 267-2 残存高 15.8 5.1	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ大きく開き、端部は摘み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面タケハケ後ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡灰褐色 外: 淡黄褐色
	38	甕	復口径 267-2 残存高 15.8 4.9	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ大きく開き、端部は摘み上げて終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
	39	甕	復口径 279 残存高 18.0 5.3	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は外方へ開き、端部は摘み上げて終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色
	40	甕	残存高 202 5.2	複合口縁。口縁下端部はやや鋭い。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
	41	甕	復口径 96 残存高 30.0 6.7	複合口縁。口縁下端部は鋭い。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色
	42	鼓型器台	残存高 208-251 底径 6.8 21.2	脚部。脚部口縁下端部はやや鋭い。脚部は外方へ「八の字状」へ開く。脚端部は摘み出して丸く終わる。		焼成 胎土 備考	密。1mmの砂粒を多く含む 脚部外面黒斑
豎穴住居5 (旧豎穴住居6)	43	甕	復口径 275 残存高 13.8 4.3	複合口縁。口縁下端部は鋭い。口縁部は大きく外方に開き、端部などで丸く終わる。口縁部外面7条の平行線が違う。	口縁部内外面ナデ仕上げ。頸部外面ナデ仕上げ、内面ヘラケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色

遺構名 図番号	用具 番号	器種 取上No.	法量(cm)	形態	技法	特徴
豊穴住居5 (旧豊穴住居6)	44	甕 272-277	復口径 15.6 残存高 3.7	複合口縁。口縁下端部は鋸い。 口縁部は大きく外方に開き、端部はなで丸く終わる。 口縁部外面6条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面へラケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 口縁部外面炭化物の付着
		甕 295	復口径 16.2 残存高 5.1	複合口縁。口縁下端部はやや鋸い。 口縁部は大きく外方に開き、端部は擦み上げて終わる。 器壁は薄い。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面へラケズリ。	色調 内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 口縁部外面黒斑
		甕 272	復口径 16.8 残存高 6.5	複合口縁。口縁下端部はやや鋸い。 口縁部は大きく外方に開き、端部は擦み出して丸く終わる。 器壁は薄い。	風化の為調整不明。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 1mmの砂粒を少量含む
	47	高坏 298-1	復口径 17.5 残存高 3.1	環部。外方へ大きく開き、端部は角ばりながら丸味をもつて終わる。	环部内外面丁寧なナデ仕上げ。	色調 内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 环部内部一部黒斑
		低脚坏 302	残存高 2.7	坏、脚部片。	風化の為調整不明。	色調 内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 備考
		低脚坏 296	残存高 3.2 復底径 4.4	环、脚部片。 直状の环部。脚部は短く「八の字状」に外方へ開き、端部は擦み出して丸く終わる。	环部外面ミガキ、内面丁寧なナデ仕上げ。 脚部内外面ナデ仕上げ。	色調 内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 环部内部一部黒斑
豊穴住居6 (旧豊穴住居7)	50	低脚坏 291	残存高 5.2 復底径 5.8	埃状の坏部。 脚部は短く「八の字状」に外方へ開き、端部はつまみ出して終わる。	环部、脚部内外面丁寧なナデ仕上げ。	色調 内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 備考 1mmの砂粒を少量含む
		蓋 357	復口径 10.8 残存高 4.9	直口盖。外方へ大きく開く口縁部。 口縁部は丸く終わる。	風化の為調整不明。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 備考
	52	蓋 344-354	復口径 15.0 残存高 5.2	複合口縁。口縁下端部は下垂し、擦み出して丸く終わる。 口縁部は直立気味で、端部で外方へ僅かに開き、丸みを持って終わる。	口縁部、頸部内外面ナデ仕上げ。	色調 内: 結褐色 外: 暗褐色 焼成 良好 胎土 備考 砂粒を多く含む
		蓋 392	残存高 3.5 底径 5.1	底部。	外面ハケメ調整後ナデ仕上げ、内面へラケズリ。	色調 内: 淡褐色 外: 淡褐色 焼成 良好 胎土 備考 底部外面一部黒斑
		蓋 340	復口径 3.8 器高 7.2 復底径 13.4	擦み部を持ち、端部は擦み上げながら、僅かに外へ丸みを持って終わる。 口縁部は内溝しながら「八の字状」に開き、端部で丸く終わる。	蓋内外面ナデ仕上げ。 擦み部と蓋部の接合内面に、指押さえ痕が残る。	色調 内: 淡褐色 外: 淡褐色 焼成 良好 胎土 備考 蓋部外面一部黒斑

遺構名 図番号	器種 番号	法量(cm) 取上No.	形態	技法	特徴	
竪穴住居6 (旧堅穴住居7)	甕 55	復口径 16.3 残存高 5.3	複合口縁。口縁下端部は裁い。 口縁部は外方へ開き、端部はナデ上げて丸く終わる。 口縁部外面に7条の平行線が巡る。 肩部外面に櫛状工具による施文。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1.5mmの砂粒を多く含む
		復口径 21.3 残存高 6.0	複合口縁。口縁下端部はやや鋲く、 後に下垂して丸く終わる。 口縁部は外方へ開き、端部はナデ上げて丸く終わる。 口縁部外面に9条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。1.5mmの砂粒を含む
	甕 57	復口径 28.2 残存高 6.5	複合口縁。口縁下端部は裁い。 口縁部は外方へ大きく開き、端部はナデ上げて丸く終わる。 口縁部外面に11条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 黄褐色 外: 黄褐色 良好 密。1.5mmの砂粒を多く含む
		復口径 15.2 残存高 9.1	複合口縁。口縁下端部は裁い。 口縁部は大きく外へ開き、端部は揃み出して丸く終わる。 肩部はよく張りり、外側に波状文が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 肩部外面ヨコハケの後一部ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡褐色 外: 淡褐色 良好 密。 口縁部、肩部外面炭化物付着
	器台 59	残存高 4.3 底径 14.5	脚部。「八の字状」に簡く脚部、端部は揃み出して丸く終わる。 脚部外面に7条の平行線が巡る。	脚部外面丁寧なナデ仕上げ、 内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黃褐色 外: 淡黃褐色 良好 密。 脚部内面炭化物付着
		復口径 22.2 残存高 8.5	环部。端部の环部から、直立する环部へ続く。端部はナデによるカーブが見られ、なで上げて丸く終わる。	环外端タテハケ後丁寧なナデ仕上げ、 内面暗紋状の丁寧なミガキが施される。 口縁部端内ヨコ方向のミガキ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 黄褐色 外: 黄褐色 良好 密。1mmの砂粒を含む 环内外赤色塗彩
	鉢 61	復口径 18.0 残存高 8.4	平底の底部から?状のカーブを持つて口縁部に続く。口縁端部は角張りながら面を持ちつつ丸く終わる。	外延兎ハケ調整の後ナデ仕上げ。 一部不正方向の細かなミガキが施される。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。その上をヨコ方向の細かなミガキが丁寧に施される。	色調 焼成 胎土 備考	内: 青色 外: 青色 良好 密。0.5mmの砂粒を多く含む
		復口径 28.5 残存高 27.6 復口径 27.9	頸部上位に横向きに取っ手が一対付く。口縁部から頸部下位に向かい屈くすばり気味。	口縁端部はナデにより細くなり、揃めだして終わる。内面ヨコ方向のケズリ。 胴部外面風化の為調整不明、内面タテ・ヨコ方向のケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 黄褐色 外: 黄褐色 良好 密。砂粒を含む 胴部内面一部黒斑
竪穴住居7 (竪穴住居8)	注口土器 63	577 残存長 6.0	注口部。	風化の為調整不明。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。
		高坏 578 残存高 2.5	坏部・脚部片。	風化の為調整不明。	色調 焼成 胎土 備考	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 良好 密。
竪穴住居8 (旧堅穴住居9)	甕 65	562 残存高 5.2	複合口縁。口縁下端部は下垂して揃み出して終わる。 口縁部は外方へ開く。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 焼成 胎土 備考	内: 黄褐色 外: 黄褐色 良好 密。

造構名 図番号	指標 番号	器種 取上No.	法量(cm)	形態	技法	特徴	
						色調	内:黄褐色 外:黄橙褐色 良好 密 備考
	66	壺 469-3	復底径 残存高	5.0 3.5	底部。	外面タテ方向のミガキ、内面ケズリ。	内:黄褐色 外:黄橙褐色 良好 密 備考
	67	壺 407	復口径 残存高	19.0 3.2	長頸壺。 口縁部外側に15条の平行線が巡る。	口縁部内面ナデ仕上げ。	内:黄褐色 外:黄褐色 良好 密 備考
	68	壺 519-547	復口径 残存高	10.3 5.0	底部。	底部外面ナデ仕上げ後細かなタテ方向のミガキ、内面風化の為調整不明。	内:灰色 外:黄黒色 良好 密 備考 内外面黒斑
	69	壺 464	復口径 残存高	15.0 4.6	複合口縁。口縁下端部は鋭い。 口縁部は直立気味で、端部は摘み上げて丸く終わる。 口縁外側に平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄褐色 外:黄褐色 良好 密 備考 口縁部外面風化物付着
	70	壺 495	復口径 残存高	16.0 4.1	複合口縁。口縁下端部は下垂して丸く終わる。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。 口縁部外面に7条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄茶褐色 外:暗黄茶褐色 良好 密 1~2mmの砂粒を多く含む 口縁部外面風化物付着
豊穴住居8 (旧豊穴住居9)	71	壺 406	復口径 残存高	17.5 4.0	複合口縁。口縁下端部は僅かに下垂して丸く終わる。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。 口縁部外面に5条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄灰色 外:黄茶褐色 良好 密 備考 口縁部外面風化物付着
	72	壺 483	復口径 残存高	18.0 5.0	複合口縁。口縁下端部は僅かに下垂して丸く終わる。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。 口縁部外面に5条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄灰色 外:黄灰色 良好 密 1mmの砂粒を多く含む 口縁部外面風化物付着
	73	壺 418	復口径 残存高	16.0 5.7	複合口縁。口縁下端部は下垂して丸く終わる。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。	口縁部内外面細かなミガキ。 肩部外面細かなミガキ、内面ケズリ後ミガキ。	内:淡黒褐色 外:淡黒褐色 良好 密 備考 肩部外面一部煤付着
	74	壺 463	復口径 残存高	20.0 3.7	複合口縁。口縁下端部は鋭い。 口縁部は外へ開き、端部は肥厚し角ばりながら丸く終わる。 口縁部外面に5条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄褐色 外:黄褐色 良好 密 備考
	75	壺 484	復口径 残存高	22.6 5.5	複合口縁。口縁下端部は下垂して丸く終わる。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄褐色 外:暗黄茶褐色 良好 密 Inn大の砂粒を多く含む 口縁部外面風化物付着、黒斑有
	76	壺 557	復口径 残存高	17.6 3.7	複合口縁。口縁下端部は鋭い。 口縁部は直立し摘み上げて終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 端部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	内:黄褐色 外:黄褐色 良好 密 備考

遺構名 図番号	規 格 番 号	器 種 取 上 No.	法 量(cm)	形 態	技 法	特 徴
窓穴住居8 (旧壁穴住居9)	77	甕 401-574	復口径 17.0 残存高 4.3	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は僅かに外へ開き、端部は摘み上げて終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面一部炭化物付着
	78	甕 401-504	復口径 17.0 残存高 5.8	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外へ開き、端部はヨコに肥厚して、面を持ちながら丸く終わる。	口縁部外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 赤茶色 外: 赤茶色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部、肩部内外面赤色塗彩
	79	甕 423	復口径 19.0 残存高 4.8	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外へ開き、端部は摘み出しで丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考
	80	甕 467	復口径 20.0 残存高 5.0	複合口縁。口縁下端部は欠損。 口縁部は直立気味で、端部は摘み上げて丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 暗褐色 外: 黑褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面炭化物付着
	81	甕 482-513 519-1	復口径 12.2 残存高 5.0	小型の甕。複合口縁。 口縁下端部は丸く無い。口縁部は外に開き端部は摘み出して終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 暗褐色 外: 黑褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面炭化物付着
	82	甕 519-2	復口径 15.0 残存高 4.3	小型の甕。複合口縁。 口縁下端部は欠損。口縁部は外に開き、端部は摘み出して丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 口縁黒色。頸部淡黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面炭化物付着
	83	甕 512	復口径 17.0 残存高 6.6	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外に開き、端部は摘み出して丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考
	84	甕 452	復口径 16.0 残存高 4.2	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外に開き、端部は摘み出して丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 淡褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面黒斑
	85	甕 555	復口径 15.0 残存高 6.0	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外に開き、端部は摘み出して丸く終わる。 肩部は張る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考
	86	甕 569	復口径 16.1 残存高 6.0	複合口縁。口縁下端部は丸く無い。 口縁部は外方へ大きく開き、端部は丸く終わる。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 頸部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考
	87	高坏 475	復口径 16.7 残存高 2.7	口縁下端部を持つ坏部。坏部は大きく外方へ、開き端部はさらにヨコ方向へ延びながら摘み出して丸く終わる。 口縁下端部は下垂し丸く無い。	坏部内外面丁寧なナデ仕上げ。	色調 内: 赤橙色 外: 赤橙色 焼成 良好 胎土 密 備考 壁部内外面赤色塗彩

遺構名 図番号	規 格 番号	器 種 取上No.	法 量(cm)	形 態	技 法	特 徴	
堅穴住居8 (旧堅穴住居9)	88	高坏 598	復口径 19.0 残存高 2.5	口縁下端部を持つ坏部。坏部は大きく外方へ開き端部はさらにヨコ方向へ延びながら摘み出して丸く終わる。口縁下端部は下垂し鈍い。	坏部内外面丁寧なナデ仕上げ。	色調 内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面一部炭化物付着	
	89	高坏 554	復底径 10.0	脚部。	風化の為調整不明。	色調 内: 黄橙色 外: 黄橙色 焼成 良好 胎土 密 備考 脚部外面一部炭化物付着	
	90	高坏 556	残存高 5.3	脚部。脚部内部中央孔に土器片が差し込まれている。	脚部外面タテ方向のミガキ、内面ケズリ。	色調 内: 極褐色 外: 淡褐色 焼成 良好 胎土 密 備考	
	91	高坏 386	残存高 5.5	脚部。	脚部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調 内: 明黄褐色 外: 明黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 口縁部外面一部炭化物付着	
	92	器台 484	残存高 3.0 底径 17.0	脚部。脚内部に段を持ち、外方に「八の字状」に開きながら、端部で丸く終わる。 脚外面上6条の平行線が巡る。	脚部外面ナデ仕上げ、外側ケズリ。 端部内面ナデ仕上げ。	色調 内: 赤茶色 外: 赤黄色 焼成 良好 胎土 密 備考 脚部外面赤色塗彩	
	93	器台 560	残存高 16.4 底径 3.7	脚部。外へ開きながら直立姿味に終わる。端部は角ばり面を持つ。 脚端部の口縁下端部は丸く丸い。	脚部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。 端部内面ナデ仕上げ。	色調 内: 黄橙色 外: 黄灰色 焼成 良好 胎土 密 備考 脚部外面一部黒底	
	94	鼓型器台 558	底径 15.0	細くすぐまる筒部から、「八の字状」に開く脚部。脚部の口縁下端部は摘み出して丸く鈍い。 脚端部はヨコ方向に延び、角ばりながら面を持って丸く終わる。脛壁は厚い。	筒部外ナ面ナデ仕上げ、内面ケズリ。 脚部外ナ面ナデ仕上げ、内面ケズリ。 端部内面ナデ仕上げ。	色調 内: 黄橙色 外: 赤茶色 焼成 良好 胎土 密 備考 脚部外面赤色塗彩	
	95	瓶形土器 493	残存高 7.0 底径 13.5	底部。長い環状の握手が一対付く。 端部は角ばり面を持って丸く終わる。	底部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。 端部内面ナデ仕上げ。	色調 内: 極褐色 外: 赤茶灰色 焼成 良好 胎土 密 備考 底部内面から外面にかけ一部炭化物付着	
	96	壺 440	復口径 13.6 残存高 9.8	直口壺。 口縁部は外方へ開き、端部は肥厚して丸く終わる。	口縁部外面タテ方向のミガキ、内面細かなヨコ方向のミガキ。	色調 内: 赤褐色 外: 淡黄褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 壺部外面に工具痕有。	
堅穴住居9 (旧堅穴住居10)	97	壺 446	残存高 9.5 復底径 8.0	平底の底部。	底部外面丁寧なナデ仕上げ、内面風化の為調整不明。	色調 内: 暗黄褐色 外: 暗褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 壺部外面に工具痕有。	
	98	壺 442	復口径 12.6 残存高 7.1 復胴径 13.0	複合口壺。口縁下端部は丸く鈍い。 口縁部は直立し、端部は摘み上げて終わる。 口縁部外面に6条の平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。 脚部外面ナデ仕上げ後ヨコ方向の細かなミガキ。内面ケズリ。	色調 内: 噴褐色 外: 噴褐色 焼成 良好 胎土 密 備考 壺部外面の砂粒を多く含む 口縁部外面一部炭化物付着	

遺構名 図番号	測定 番号	器種 取上kg	法量(cm)	形態	技法	特質	
						色調	内: 淡黄褐色 外: 赤黄褐色 焼成 胎土 備考
豊穴住居9 (旧豊穴住居10)	99	高杯 446	残存高 3.4 脚径 3.4	環部。	环部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 赤黄褐色 焼成 胎土 備考
豊穴住居10 (旧豊穴住居11)	100	甕 430	復口径 23.0 残存高 2.7	複合口縁。口縁部は僅かに内傾し、 縁部は盛み上げて終わる。 口縁下端部は下垂し、やや鋭い。	口縁部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	101	甕 498	残存高 2.8	複合口縁。	頭部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	102	甕 630	残存高 2.0 復底径 4.2	平底の底部。	底部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 棕褐色 外: 棕褐色 焼成 胎土 備考
掘立柱建物6 (旧溝4・5)	103	甕 632-2	残存高 3.0 復底径 4.0	平底の底部。	底部外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
	104	甕 607	復口径 18.7 残存高 3.1	複合口縁。口縁下端部はやや鋭い。 口縁部外面に平行線が巡る。	口縁部内外面ナデ仕上げ。	色調	内: 棕褐色 外: 棕褐色 焼成 胎土 備考
	105	甕 631	残存高 2.0 復底径 4.2	複合口縁。口縁下端部はやや鋭い。	口縁部内外面ナデ仕上げ、頭部 外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 淡黄褐色 外: 淡黄褐色 焼成 胎土 備考
	106	甕 487	残存高 2.9	複合口縁。縁はやや鋭い。	口縁部内外面ナデ仕上げ、頭部 外面ナデ仕上げ、内面ケズリ。	色調	内: 黄褐色 外: 黄褐色 焼成 胎土 備考
							口縁部外面一部炭化物付着
掘立柱建物7 (旧溝1・2)							

表13 石製品観察表

遺構	遺物No.	分類	法量(cm)			備考	図番号	取上No.
			長さ	幅	厚さ			
竪穴住居1	S 1	台石	25.9	23.2	8.6	材質: デイサイト	第7図	69
	S 2	台石	20.2	12.2	—	材質: デイサイト、火を受けた痕跡有	第7図	68
竪穴住居2	S 3	打ち欠き石錐	7.1	6.7	4.4	材質: デイサイト	第11図	110
	S 4	砥石	9.7	4	2.8	材質: 磨灰岩	第11図	127-153
竪穴住居3	S 5	台石	27.5	23.7	6.8	材質: デイサイト	第11図	334
	S 6	砥石	12.2	6.2	3.3	材質: デイサイト	第13図	299
竪穴住居4	S 7	砥石	12.3	14.1	5.1	材質: デイサイト	第13図	234
	S 8	砥石	12.4	5.4	3.2	材質: デイサイト	第13図	190
竪穴住居5	S 9	敲石	15.5	7.1	5.1	材質: デイサイト	第14図	269
	S 10	有溝石錐	7.9	5.3	5.4	材質: デイサイト	第14図	270
竪穴住居6	S 11	石製品	12	17.7	5	材質: デイサイト	第17図	429
	S 12	台石	19.2	12.1	10.2	材質: 安山岩	第17図	378
竪穴住居7	S 13	石製楔	8	3.4	1.2	材質: 砂岩	第18図	591
	S 14	磨石	8.4	8.1	7.3	材質: デイサイト	第18図	508
竪穴住居8	S 15	台石	18.6	17.9	4.2	一部研ぎ痕有	第22図	457
	S 16	砥石	19.1	8.4	3	材質: デイサイト	第22図	539
竪穴住居10	S 17	有溝石錐	6.5	5.6	4.6	材質: デイサイト、両側のみ溝をつける	第22図	550
	S 18	台石	33	21.5	13.3	材質: 閃緑岩か?	第22図	540
搬立柱建物6	S 19	敲石	21	8.1	5	材質: デイサイト	第24図	626
	S 20	礎盤	29.9	26.7	9.7	材質: デイサイト	第26図	634

*石材の鑑定及びご指導を河合幸行氏より頂いた。記してお礼申します。

表14 鉄製品観察表

遺構	遺物No.	分類	法量(cm)			備考	図番号	取上No.
			長さ	幅	厚さ			
竪穴住居1	F 1	鉄器片	3.1	1.1	0.2		第7図	117
	F 2	鉄器片	3.1	0.8	0.2		第7図	12
竪穴住居2	F 3	刀子	7.9	1.0	0.2	研ぎ減りが著しい 木質の柄が残存する	第11図	271
	F 4	不整台形状の鉄器片	2.3	2.3	0.3	欠損品ではなく完形品	第11図	138
竪穴住居6	F 5	棒状の鉄器片	3.6	0.7	0.7		第11図	305
	F 6	不明円環状鉄製品	3.1	0.8	0.3~0.5	厚さの薄い部分は鉄板が合わ さっている	第11図	176
	F 7	無基凹基式三角形鉄錐	3.0	2.0	0.9	中央に孔有。鋸ぶくれによる 変形が著しい	第17図	383
竪穴住居8	F 8	袋状鉄斧の側部片	3.2	2.5	0.2	断面が梯錐なので、意図的に 整などで落しているか?	第22図	535
	F 9	整	3.4	2.1	0.2		鋸の上面に木質部が残存	第22図
竪穴住居10	F 10	槍頭	3.5	1.3	0.2			
	F 11	鉄斧刃部片	2.8	2.2	0.2			
	F 12	曲刃鎌先端部片	4.3	2.1	0.4			
	F 13	不明鉄製品	4.7	2.6	0.5	0.5~0.6mm厚さか?	第22図	535
	F 14	刀子片	3.5	2.0	0.2			
		素環頭の刃又は刀子	5.6	2.1	0.2	握手穴の穴幅0.5cm		
		V字状の鉄器片	4.4	1.2	0.25 ~0.3			
	F 15	袋状鉄斧の袋部の破片	3.0	1.5	0.1			

*竪穴住居6・取り上No.364と4Bグリット出土・取り上げNo.280は、X線撮影の結果などから、本報告書への実測図などの掲載はしないでいい。

*鉄製品の鑑定及び示唆にむご指導を高尾浩司氏より頂いた。記してお礼申します。

図 版



1. 調査区 全景(東より)



2. 穫穴住居1・2 検出状況(東より)



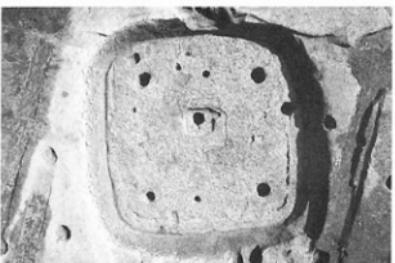
3. 穫穴住居1・掘立柱建物1 完掘(東より)



4. 穫穴住居2 遺物・炭化材出土状況(東より)



5. 穫穴住居2 壕(26)出土状況(東より)



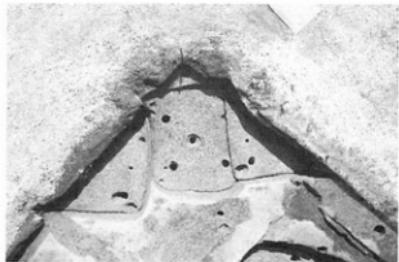
6. 穫穴住居2 完掘(西より)



7. 穫穴住居3・5 検出状況(南より)



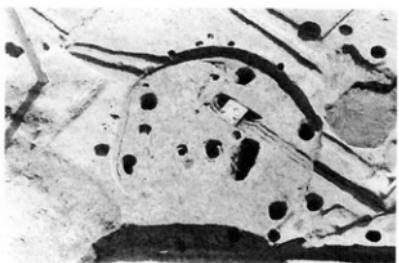
8. 穫穴住居4・5 検出状況(南より)



1. 竪穴住居 3・4・5 完掘(北より)



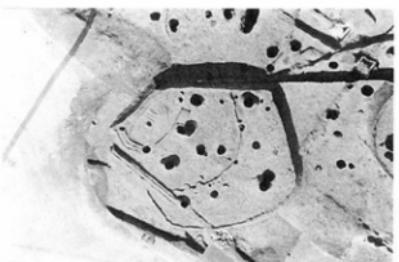
2. 竪穴住居 6・7 検出状況(西より)



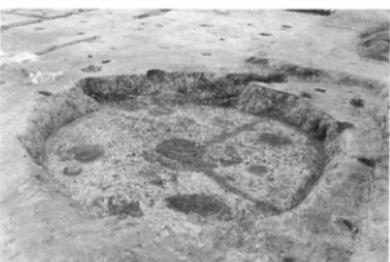
3. 竪穴住居 6 完堀(北より)



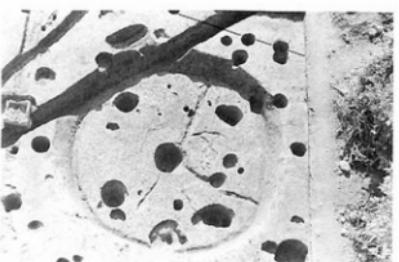
4. 竪穴住居 7 挖り下げ中(北より)



5. 竪穴住居 7 完堀(北より)



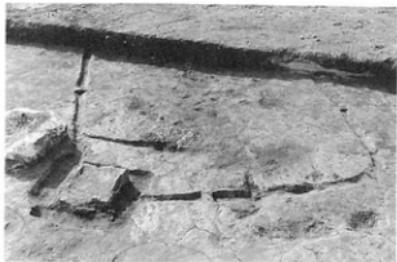
6. 竪穴住居 8 床面検出状況(北より)



7. 竪穴住居 8・櫛列 1 完堀(北より)



8. 竪穴住居 6・7・8 完堀(北より)



1. 竪穴住居9 検出状況(北より)



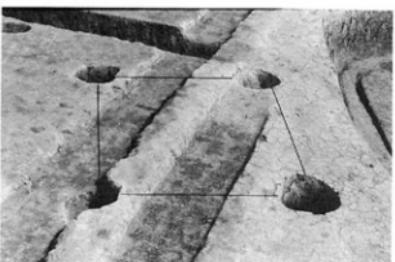
2. 竪穴住居9 完堀(北より)



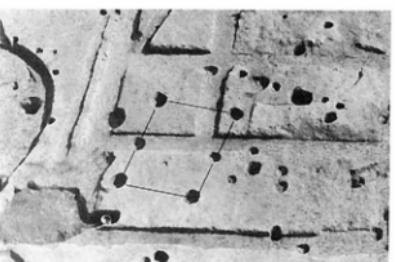
3. 竪穴住居10 検出状況(東より)



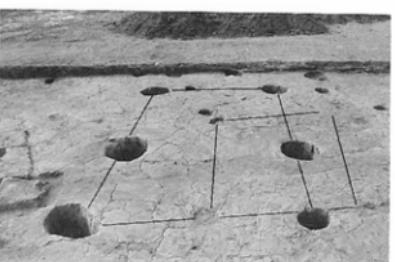
4. 竪穴住居10 完堀(東より)



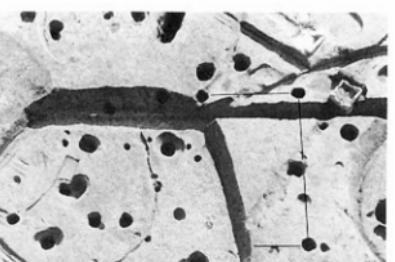
5. 堀立柱建物1 完堀(西より)



6. 堀立柱建物2 完堀(西より)



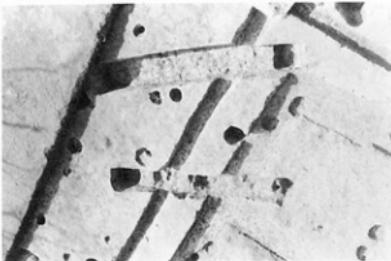
7. 堀立柱建物3・4 完堀(西より)



8. 堀立柱建物5 完堀(西より)



1. 掘立柱建物 6(布掘り) S20出土状況(北より)



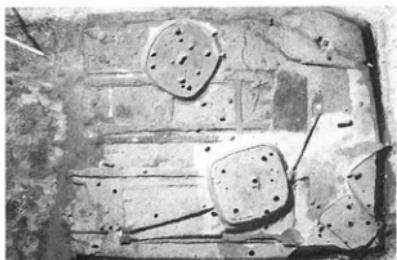
2. 掘立柱建物 6(布掘り) 完堀(北より)



3. 掘立柱建物 6・7(布掘り) 検出状況(東より)



4. 掘立柱建物 7(布掘り) 完堀(西より)



5. 調査A区 完堀全景(上空より)



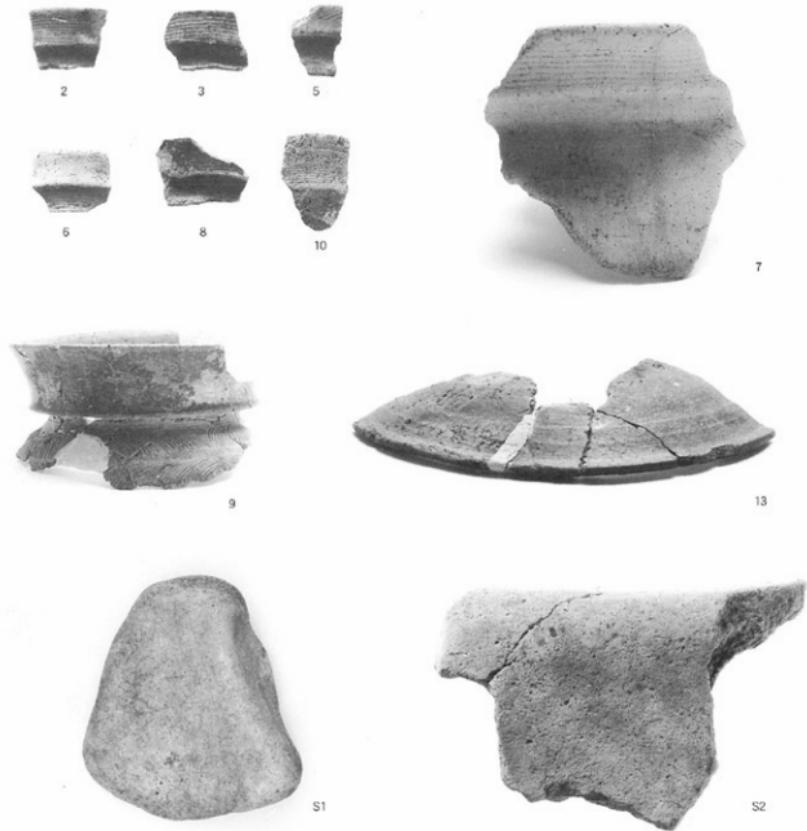
6. 調査B区 完堀全景(上空より)



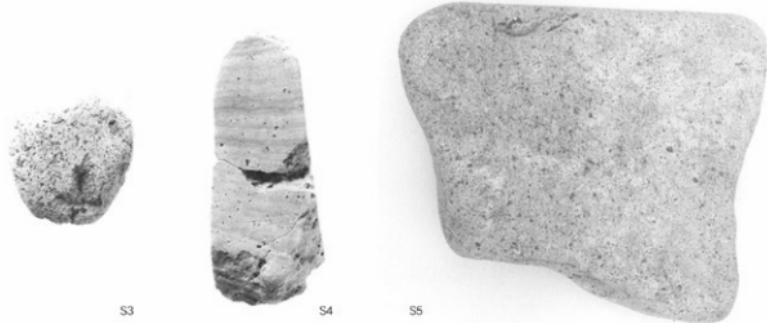
7. 試掘トレンチ(南より)



8. 調査完了後埋め戻し風景(東より)



1. 積穴住居 1 出土遺物



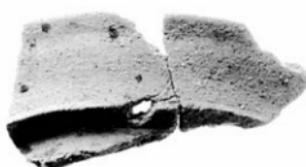
2. 積穴住居 2 出土遺物 1



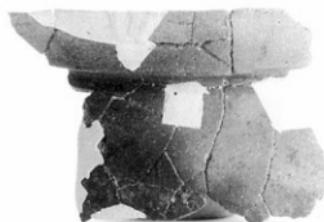
16



17



18



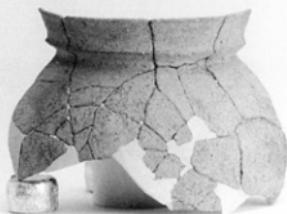
19



20



21



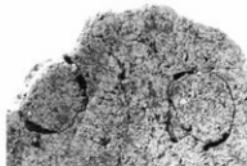
22



23



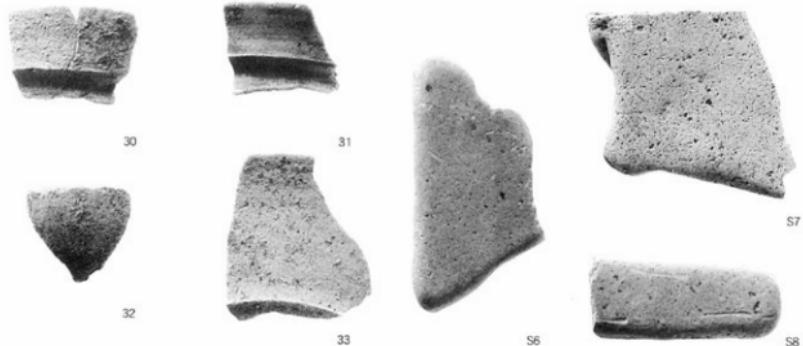
24



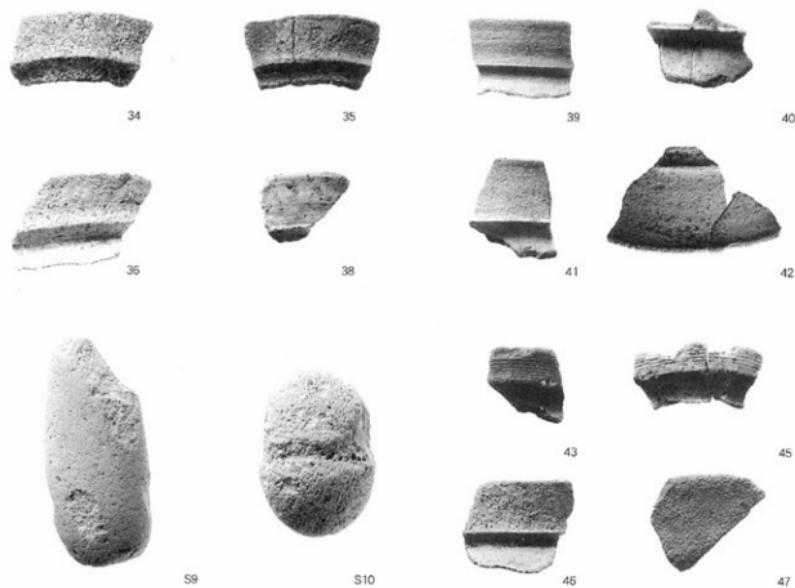
瓶形土器把手接合部



26



1. 穹穴住居 3 出土遺物



2. 穹穴住居 4 出土遺物

3. 穹穴住居 5 出土遺物 1

4. 穹穴住居 5 出土遺物 2

图版 8



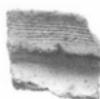
S1



S5



S2



S6



S7



S3



S4



S8



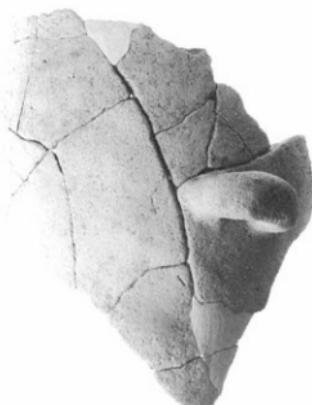
S9



S10



S11



S12

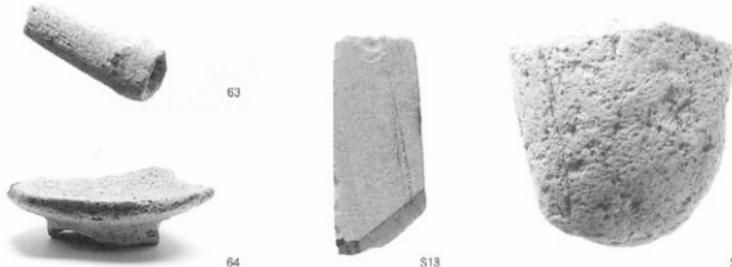


S11

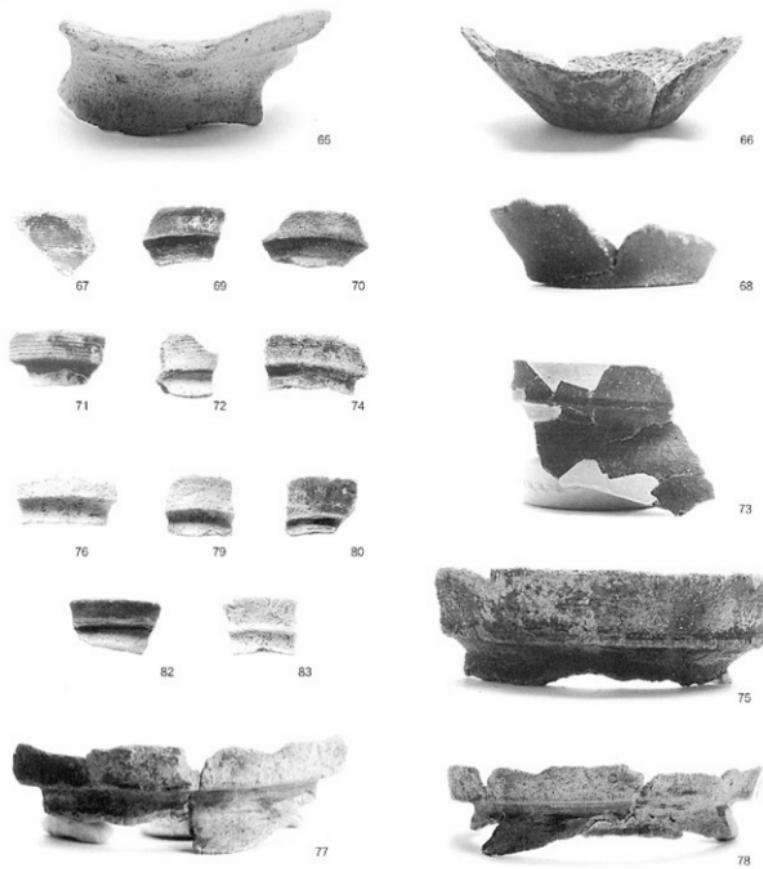


S12

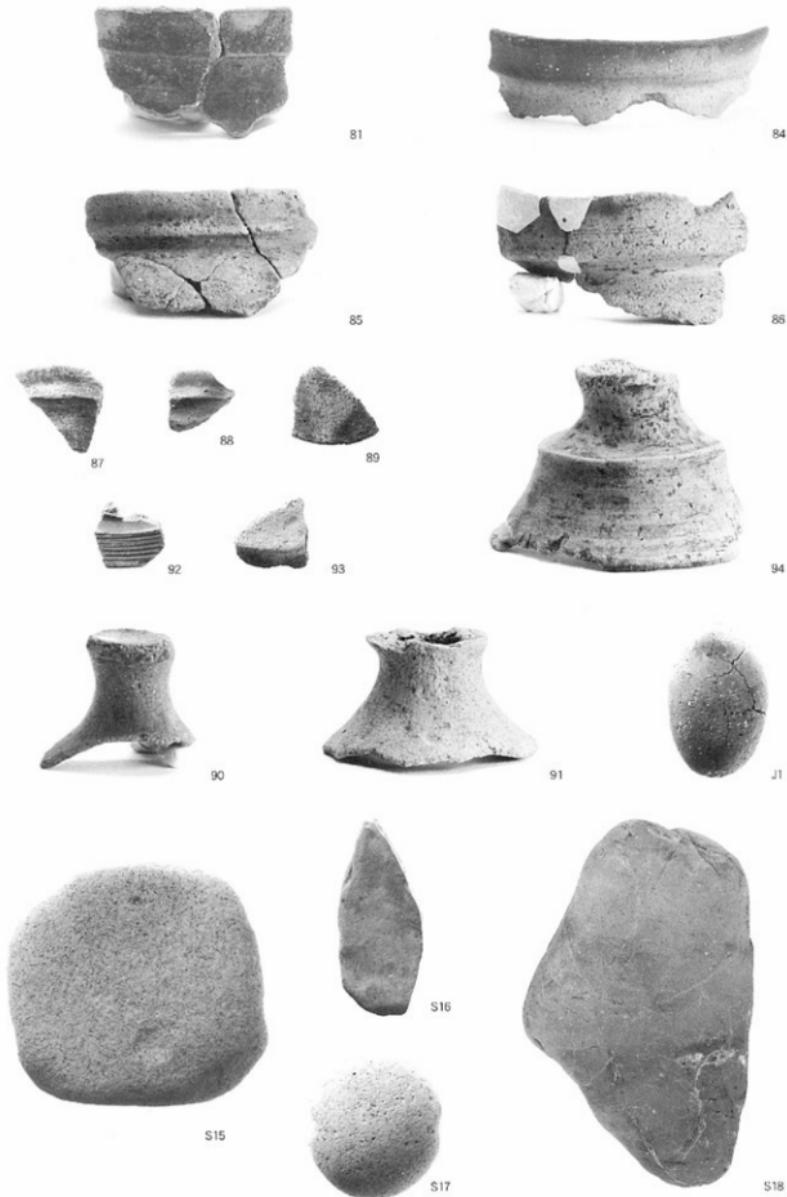
竖穴住居 6 出土遗物



1. 壓穴住居 7 出土遺物



2. 壓穴住居 8 出土遺物 1



竪穴住居 8 出土遺物 2



96



99



98

1. 堅穴住居9 出土遺物



100



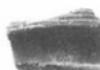
101



102



103



104

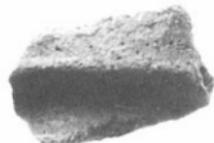


S19



105

2. 堅穴住居10 出土遺物



106

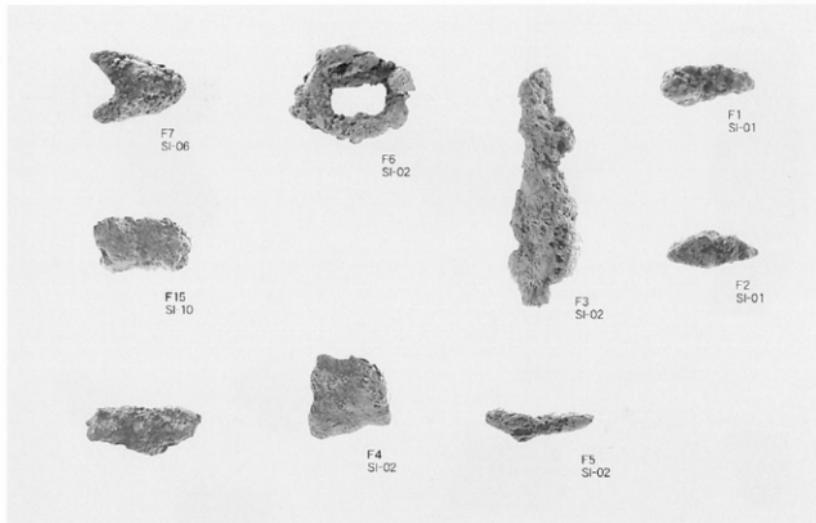


S20

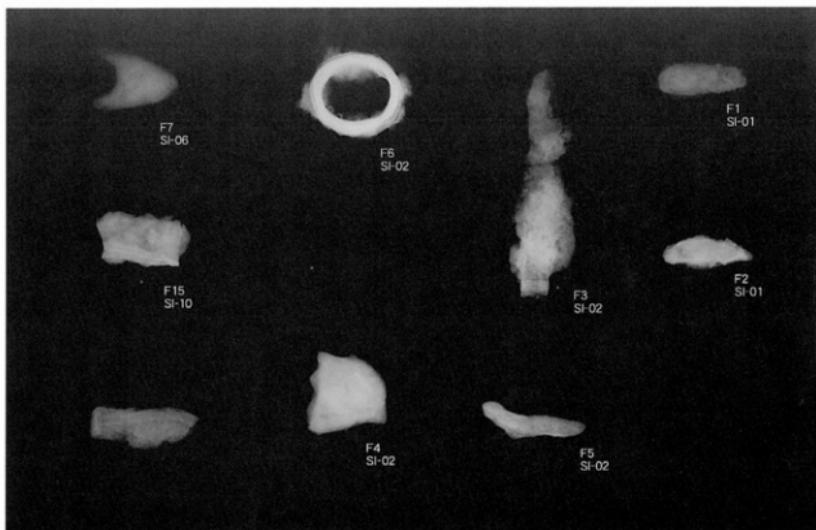
4. 掘立柱建物7 出土遺物

3. 掘立柱建物6 出土遺物

図版12

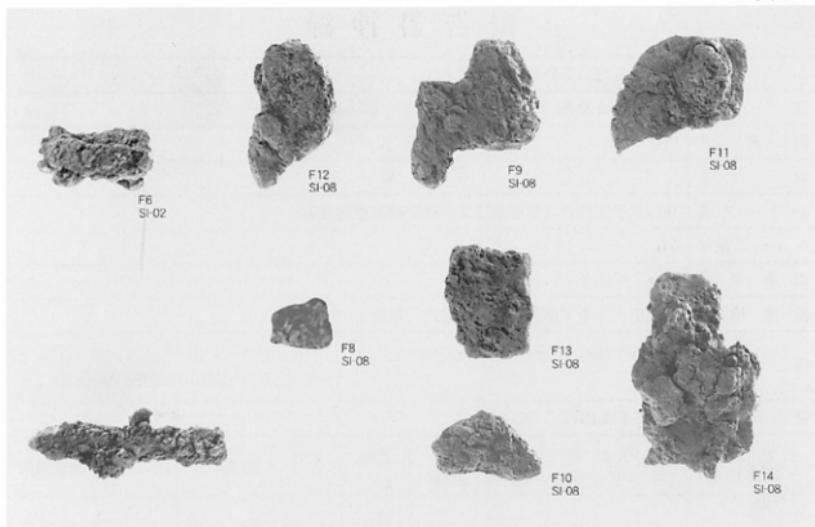


遺構出土鉄製品

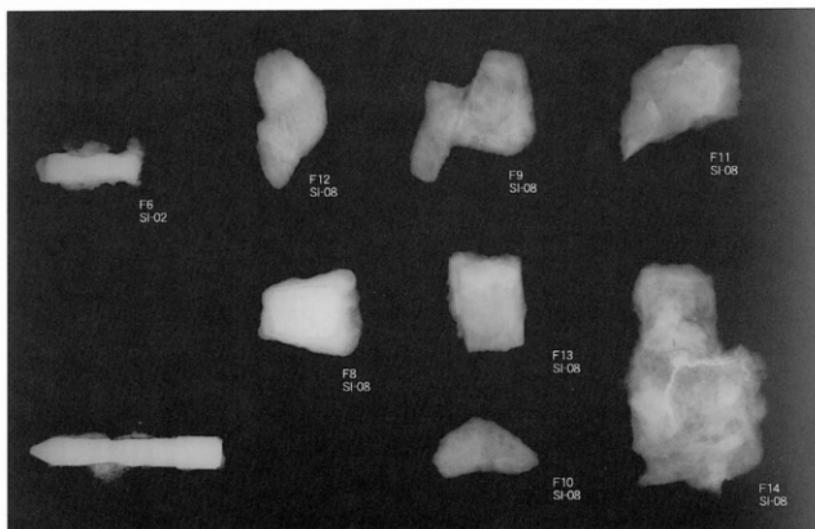


鉄製品X線写真

図版13



遺構出土鉄製品



鉄製品X線写真

報告書抄録

ふりがな	きたはらだい 5いせき						
書名	喜多原第5遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	56						
編著者名	笛尾 千恵子						
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL・FAX 0859-22-7209 E-mail : maibun@sanmedia.or.jp						
発行年月日	2007(平成19)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
喜多原第5遺跡	鳥取県米子市 泉字喜多原	31202	35度 25分 10秒	133度 25分 52秒	2006. 8. 16 ~ 2006. 11. 10	800m ²	鳥取県立 喜多原学 園改築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
喜多原第5遺跡	集落跡	弥生時代後期 ~ 古墳時代前期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝状遺構 柵列 ピット	12 7 5 1	弥生土器、土師器 石台、石錘、鉄製品		

要 約	
喜多原第5遺跡は、米子市街地の南西、中国山地の名峰大山（標高1,729m）の北西に在り、大山火葬場などが創り上げたなどらかな台地の一角に位置する。遺跡からは淀江平野が一望され、北東の台地上には国史跡斐木晩田遺跡が在る。今回の調査では、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の集落跡が確認された。遺構は、竪穴住居跡12棟・掘立柱建物跡7棟・溝状遺構5・柵列状遺構1である。竪穴住居跡の検出では、鍛冶関連遺構とみられる竪穴住居跡1棟が確認された。また、掘立柱建物跡の検出では、布掘り建物2棟が確認された。遺物は各遺構より、弥生土器、土師器、鉄製品、石製品、土製品などが出土した。調査の結果、大山山麓周辺の弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の集落遺跡の様相が、僅かながら解明されるとともに貴重な資料の蓄積となった。	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書56

喜多原第5遺跡

2007年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団
埋蔵文化財調査室
〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1
電話・FAX (0859) 22-7209

印 刷 国頭印刷 有限会社
〒689-3402鳥取県米子市淀江町淀江690
TEL. (0859) 56-2117 FAX. (0859) 56-2119